

本能寺城跡

—平安京左京四条二坊十五町—

2012年

古代文化調査会

本 能 寺 城 跡

—平安京左京四条二坊十五町—

2012年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区西洞院通六角下る池須町において、MID都市開発株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京左京四条二坊十五町・本能寺城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、MID都市開発株式会社より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は家崎がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、板谷桃代、水谷明子、山田学が分担し、製図は水谷が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（壬生）、国土地理院発行の25000分の1の地図（京都西南部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。
9. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

網 伸也 家原圭太 今井義浩 宇野隆志 馬瀬智光 梶川敏夫 北田栄造 佐藤喜彦
白井大輔 鈴木久史 谷口豊繁 西森正晃 長谷川行孝 平尾政幸 堀 大輔 堀 俊明
堀 佳子 宮原健吾 村田晋也 山本雅和 吉川義彦 吉田公茂
（株）明輝建設 （株）大高建設 （有）京都編集工房 （財）京都市埋蔵文化財研究所
（株）東洋設計事務所 MID都市開発(株)

本文目次

本能寺城跡・平安京左京四条二坊十五町

I 調査の経過	1
II 遺構	7
III 遺物	17
IV まとめ	30

図版目次

図版 1 遺跡	1 北半部第 1 面全景 (北東から)
	2 北半部第 2 面全景 (北東から)
図版 2 遺跡	1 北半部第 3 面全景 (北東から)
	2 北半部第 4 面全景 (北東から)
図版 3 遺跡	1 北半部第 5 面全景 (北東から)
	2 井戸136 (西から)
図版 4 遺跡	1 溝193・230 (西から)
	2 土壇237 (東から)
図版 5 遺跡	1 南半部第 1 面全景 (北から)
	2 南西隅部第 1 面 (南東から)
図版 6 遺跡	1 南半部第 2 面全景 (北から)
	2 南西隅部第 2 面 (南東から)
図版 7 遺跡	1 南半部第 3 面全景 (北から)
	2 南西隅部第 3 面 (南東から)

- 図版 8 遺跡 1 井戸322 (南から)
 2 井戸352 (西から)
- 図版 9 遺物 土壙237・柵 1 出土遺物
- 図版10 遺物 溝411・206・193出土遺物
- 図版11 遺物 井戸352・整地層・井戸322・土壙273出土遺物
- 図版12 遺物 土壙134・365・井戸136・池128・土壙139出土遺物
- 図版13 遺物 井戸352・土壙365出土遺物
- 図版14 遺物 溝230・土壙179・365・井戸352・土壙288・346出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	平安京条坊と調査地位置図	2
図 4	四行八門と調査位置関係図	2
図 5	東壁断面実測図	4
図 6	西壁・北壁断面実測図	5
図 7	南壁・西壁 (南西部)・北壁 (南西部) 断面実測図	6
図 8	南北断面 (Y-22,362mライン) 実測図	8
図 9	東西断面 (X-110,112mライン) 実測図	8
図10	池128南北断面実測図	8
図11	土壙193断面実測図	8
図12	土壙355・柱穴381断面実測図	8
図13	溝206断面実測図	8
図14	第 1・2 面遺構実測図	10
図15	第 3・4 面遺構実測図	11
図16	第 5 面遺構実測図	12
図17	土壙237出土遺物実測図	12
図18	柵 1～7 実測図	14
図19	井戸352・332・136実測図	15
図20	建物 1 実測図	16
図21	土壙392出土遺物実測図	17

図22	土壙237出土遺物実測図	18
図23	柵1・4・6・7出土遺物実測図	19
図24	溝206出土遺物実測図	19
図25	溝411出土遺物実測図	19
図26	溝193出土遺物実測図	20
図27	土壙159・井戸352・土壙365・池128・井戸136・整地層②出土遺物実測図	22
図28	井戸322出土遺物実測図	23
図29	建物1出土遺物実測図	23
図30	土壙353・343・70・272・273出土遺物実測図	23
図31	土壙61出土遺物実測図	23
図32	軒瓦拓影・実測図	25
図33	丸・平瓦拓影・実測図	26
図34	石製品実測図(1)	27
図35	石製品実測図(2)	28
図36	錢貨拓影図	29
図37	中世期変遷図	32
写真1	軒平瓦177接合部	27

本能寺城跡・平安京左京四條二坊十五町

I 調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区西洞院通六角下る池須町である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京跡の左京四條二坊十五町跡及び本能寺城跡に当たる。2012年の冬、当地にMID都市開発株式会社によるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、本能寺城時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明した。京都市の指導の下、施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうことになり、調査は2012年3月より開始することとなった。

調査経過

当該地は、平安京左京四條二坊十五町に相当し、西側が油小路、東側が西洞院大路、北側が六角小路、南側が四條坊門小路に囲まれたところで、調査対象地は十五町の北東隅部の西四行北



図1 調査地点位置図 (1/25,000)

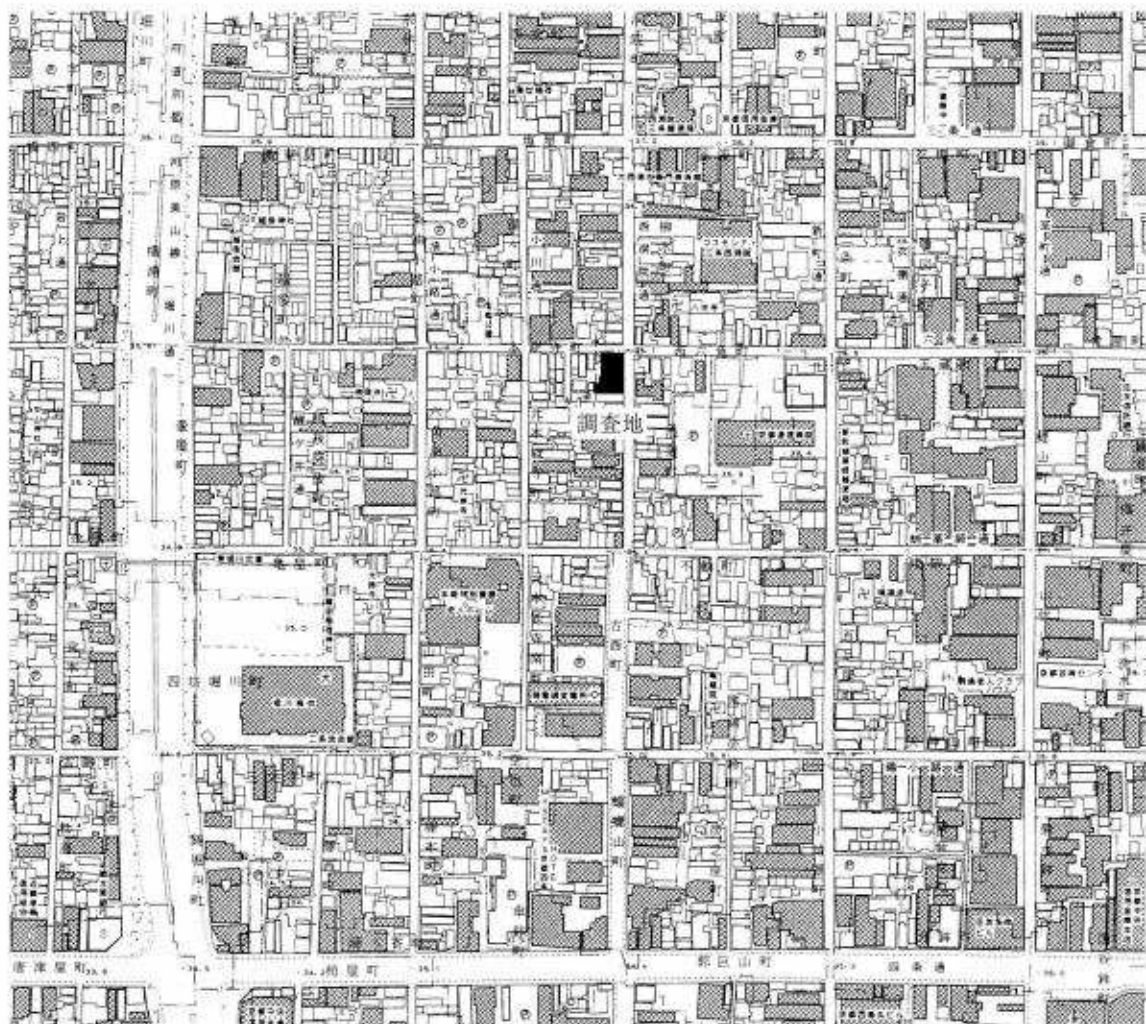


図2 調査地位置図 (1/5,000)

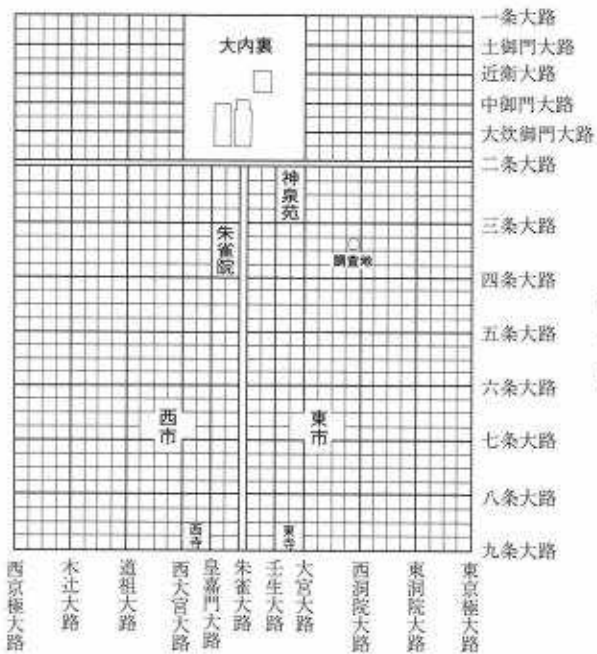


図3 平安京条坊と調査地位置図

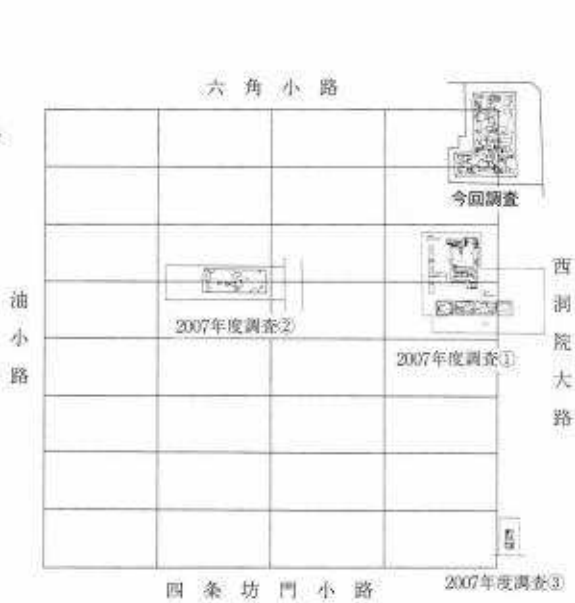


図4 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

一・二門に相当する。文献資料からは、平安時代後期この十五町に大納言藤原実季（1035～1091年）の「四条坊門亭」が置かれたことが「拾芥抄」の東京図などでうかがうことができる。またこの十五町は、天文法華の乱以後、法華宗の本能寺が再興された地であり、後に織田信長が京都における宿所として接收し、本能寺城として普請をおこなったところで、明智光秀による謀反として名高いいわゆる「本能寺の変」（天正10年〔1582〕）の舞台となったところでもある。近年、本能寺城跡は平安京跡における重要遺跡の一つとして位置づけられている。

この十五町においては過去に3カ所の発掘調査（図4）^{註1}が実施されている。いずれも2007年度に集中しておこなわれ、その結果、本能寺城南辺部の東西溝（外堀）と御殿を囲繞するとみられる石垣を伴ったL字形の溝（内堀）などが検出されている。今回の調査地は内堀が検出された地点より真北へ16m程のところにあたり、南北方向の石垣を伴う堀跡の続きが調査地内に検出されるものと想定された。しかし、結果として南北方向の堀跡が当地まで延びて来ないことが判明した。南北方向の堀跡は南隣接地で、おそらく西方向に曲がるものと推定され、堀の形状など新たな問題点が浮上した。

実際の調査においては、調査対象地が敷地の大半を占め、場内に土砂置き場を確保するため、反転方式で調査をおこなうこととした。調査においては、調査対象地を北半部と南半部に二分割し、北半部より2012年3月6日から調査を開始した。試掘調査の結果を踏まえ、盛土及び攪乱層を機械力によって除去したのち調査に着手した。北半部においては都合5面の調査をおこなった。北半部は4月13日まで調査をおこない、終了したのち、ただちに埋め戻し、南半部の調査に着手した。南半部は試掘調査の結果より削平攪乱が広範囲に及んでいることが判明しており、実際、南半部は3面の調査で終わり、現場作業は5月12日に終了した。調査面積は288㎡、実働日数は47日間であった。なお、近隣説明会を3月28日（北半部）と5月1日（南半部）の2回実施した。

調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X=-110,100m、Y=-23,356m）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十五町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

北西	X=-110,105.78m	北東	X=-110,105.28m
	Y= -22,480.88m		Y= -22,361.49m
南西	X=-110,225.15m	南東	X=-110,224.66m
	Y= -22,480.39m		Y= -22,361.00m

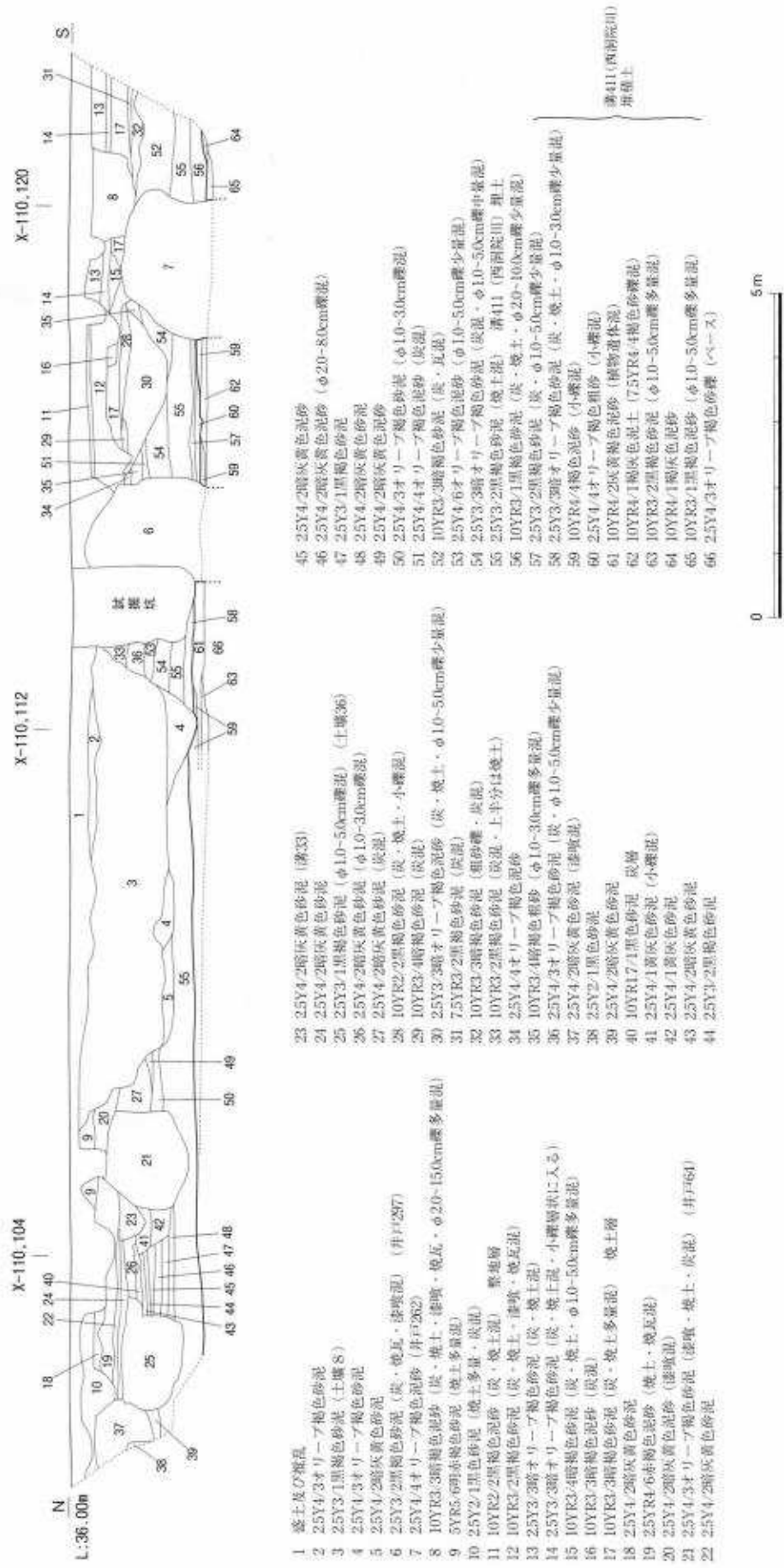
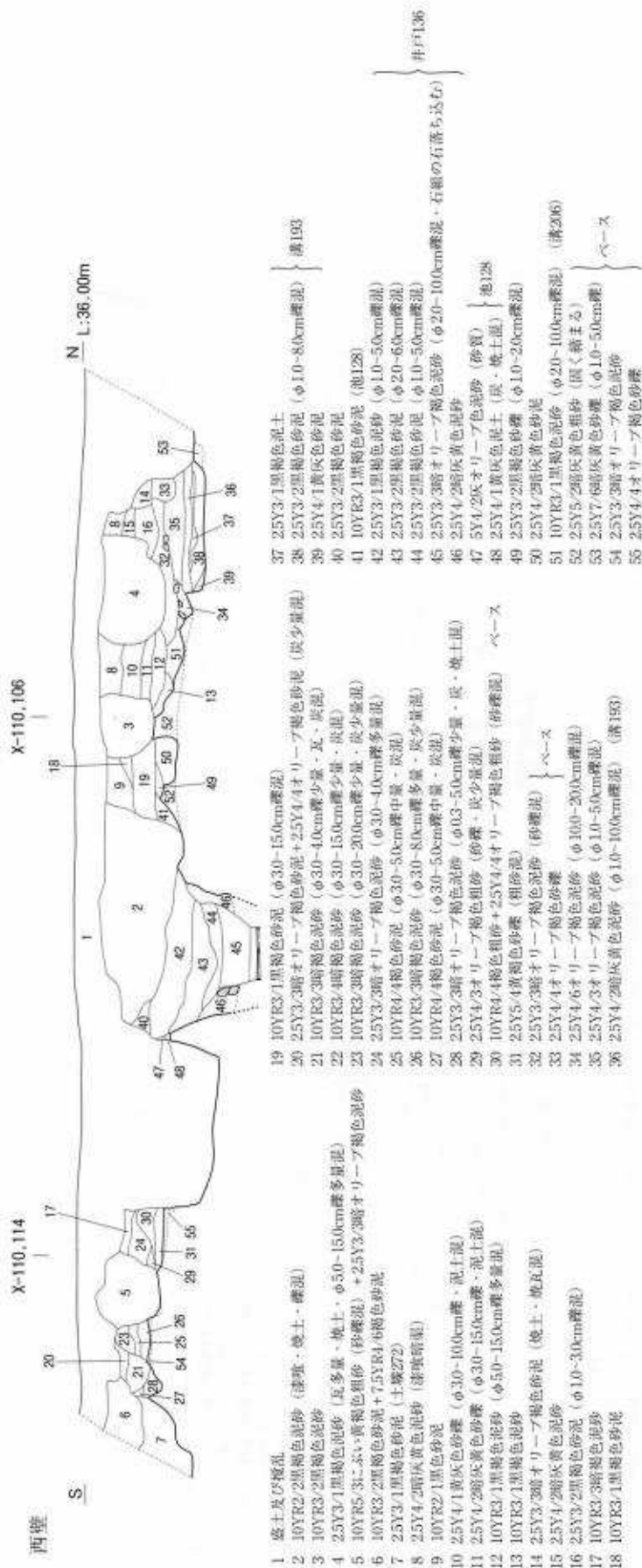


図5 東壁断面実測図 (L/100)

- 1 墓土及び雑瓦
- 2 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 3 25Y3/1黒褐色砂泥 (土層S)
- 4 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 5 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 6 25Y3/2黒褐色砂泥 (炭・焼瓦・漆喰混) (井戸257)
- 7 25Y4/4オリーブ褐色砂泥 (炭・焼瓦・漆喰混, φ20-15cm礫少量混)
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土多量混)
- 9 5YR5/6明赤褐色砂泥 (焼土多量混)
- 10 25Y2/1黒色砂泥 (焼土多量混・炭混)
- 11 10YR2/2暗褐色砂泥 (炭・焼土混) 整地層
- 12 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土・漆喰・焼瓦混)
- 13 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 14 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土混・小礫層状に入る)
- 15 10YR3/4暗褐色砂泥 (炭・焼土・φ10-50cm礫少量混)
- 16 10YR3/3暗褐色砂泥 (炭混)
- 17 10YR3/3暗褐色砂泥 (炭・焼土多量混) 焼土層
- 18 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 19 25YR4/6暗褐色泥砂 (焼土・焼瓦混)
- 20 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (漆喰混)
- 21 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (漆喰・焼土・炭混) (井戸64)
- 22 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 23 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (漆3)
- 24 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 25 25Y3/1黒褐色砂泥 (φ10-50cm礫混) (土層36)
- 26 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (φ10-30cm礫混)
- 27 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (炭混)
- 28 10YR2/2黒褐色砂泥 (炭・焼土・小礫混)
- 29 10YR3/4暗褐色砂泥 (炭混)
- 30 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土・小礫混)
- 31 7.5YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土・φ10-50cm礫少量混)
- 32 10YR3/3暗褐色砂泥 (粗砂層・炭混)
- 33 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混・上半分は焼土)
- 34 25Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 35 10YR3/4暗褐色砂泥 (炭・φ10-30cm礫少量混)
- 36 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (炭・φ10-50cm礫少量混)
- 37 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (漆喰混)
- 38 25Y2/1黒色砂泥
- 39 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 40 10YR1/1黄灰色砂泥 炭層
- 41 25Y4/1黄灰色砂泥 (小礫混)
- 42 25Y4/1黄灰色砂泥
- 43 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 44 25Y3/2黒褐色砂泥
- 45 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 46 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (φ20-80cm礫混)
- 47 25Y3/1黒褐色砂泥
- 48 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 49 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (φ10-30cm礫混)
- 50 25Y4/4オリーブ褐色砂泥 (炭・炭混)
- 51 25Y4/6オリーブ褐色砂泥 (φ10-50cm礫少量混)
- 52 10YR3/2暗褐色砂泥 (炭・炭混)
- 53 25Y4/6オリーブ褐色砂泥 (φ10-50cm礫少量混)
- 54 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭混・φ10-50cm礫中量混)
- 55 25Y3/2黒褐色砂泥 (焼土混) 溝411 (西側院用) 掘土
- 56 10YR3/1黒褐色砂泥 (炭・焼土・φ20-100cm礫少量混)
- 57 25Y3/2黒褐色砂泥 (炭・φ10-50cm礫少量混)
- 58 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土・φ10-30cm礫少量混)
- 59 10YR4/4褐色砂泥 (小礫混)
- 60 25Y4/4オリーブ褐色粗砂 (小礫混)
- 61 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (粗砂層体混)
- 62 10YR4/1暗褐色泥土 (7.5YR4/4褐色砂泥混)
- 63 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ10-50cm礫少量混)
- 64 10YR4/1暗褐色砂泥
- 65 10YR3/1黒褐色砂泥 (φ10-50cm礫少量混)
- 66 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (ベース)

0 5m

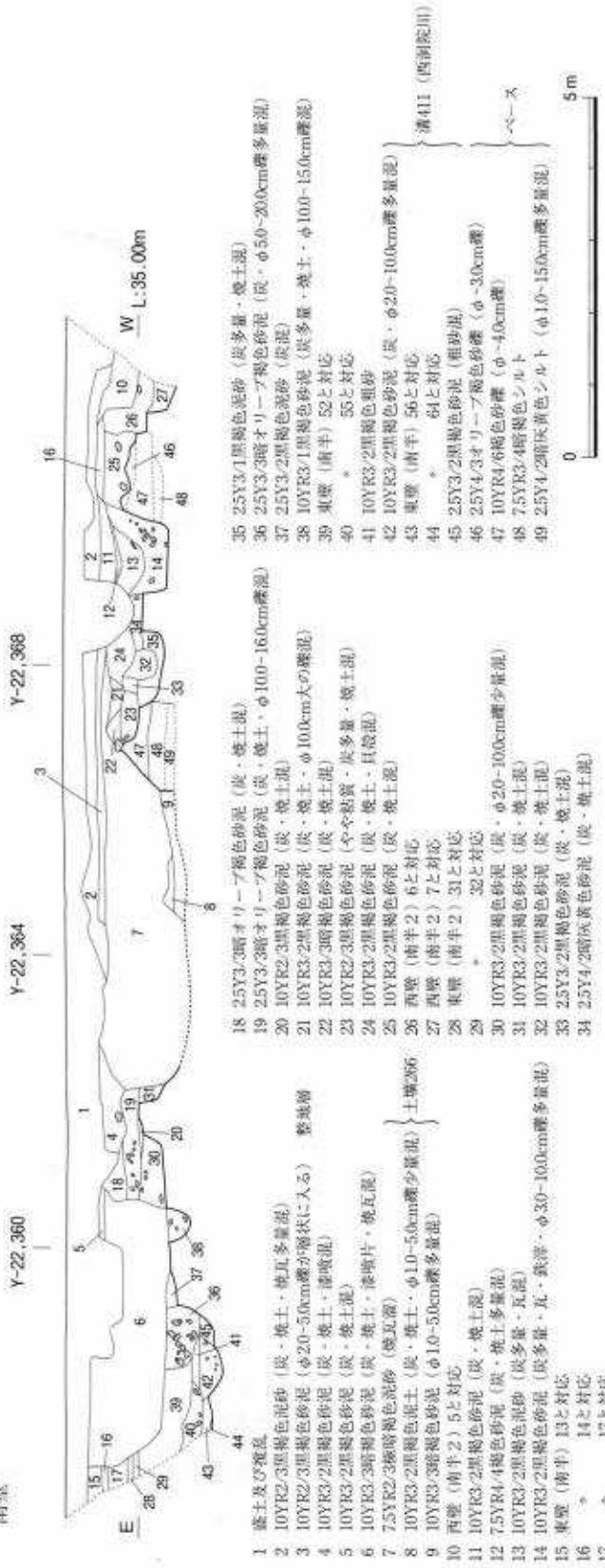
溝411(西側院用) 掘土上



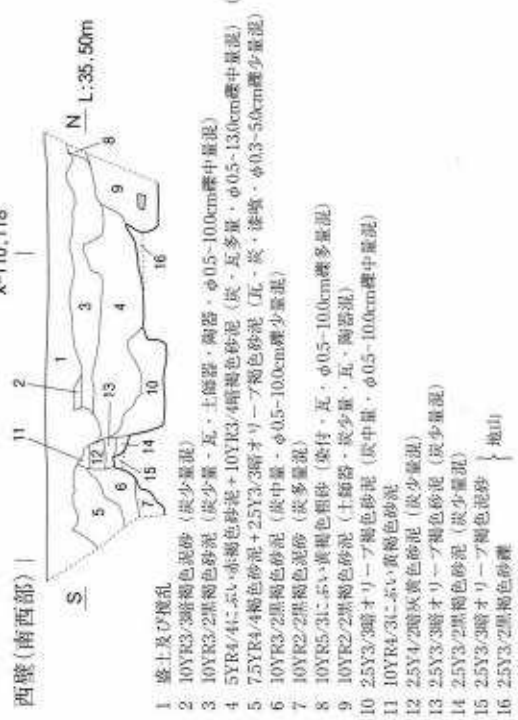
- 1 盛土及び粗乱
 2 10YR2/2黒褐色泥砂 (津喰・焼土・礫混)
 3 10YR3/2黒褐色泥砂
 4 25Y3/1黒褐色泥砂 (瓦多量・焼土・ $\phi 5.0-15.0\text{cm}$ 礫多量混)
 5 10YR5/3に赤い黄褐色粗砂 (砂礫混) + 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
 6 10YR3/2黒褐色泥砂 + 7.5YR4/6褐色泥砂
 7 25Y3/1黒褐色泥砂 (土塊27%)
 8 25Y4/2暗灰黄色泥砂 (津喰暗草)
 9 10YR2/1黒色泥混
 10 25Y4/1黄灰色砂礫 ($\phi 3.0-10.0\text{cm}$ 礫・泥土混)
 11 25Y4/2暗灰黄色砂礫 ($\phi 3.0-15.0\text{cm}$ 礫・泥土混)
 12 10YR3/1黒褐色泥砂 ($\phi 5.0-15.0\text{cm}$ 礫多量混)
 13 10YR3/1黒褐色泥砂
 14 25Y3/2暗オリーブ褐色泥混 (焼土・焼瓦混)
 15 25Y4/2暗灰黄色泥砂
 16 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 (粗礫混)
 17 10YR3/3暗褐色泥砂 ($\phi 1.0-3.0\text{cm}$ 礫混)
 18 10YR3/1黒褐色泥砂
- 19 10YR3/1黒褐色泥砂 ($\phi 3.0-15.0\text{cm}$ 礫混)
 20 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 + 25Y4/4オリーブ褐色泥混 (炭少量混)
 21 10YR3/3暗褐色泥砂 ($\phi 3.0-4.0\text{cm}$ 礫少量・瓦・炭混)
 22 10YR3/4暗褐色泥砂 ($\phi 3.0-15.0\text{cm}$ 礫少量・炭混)
 23 10YR3/2暗褐色泥砂 ($\phi 3.0-20.0\text{cm}$ 礫少量・炭少量混)
 24 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 ($\phi 3.0-4.0\text{cm}$ 礫多量混)
 25 10YR4/4褐色泥砂 ($\phi 3.0-5.0\text{cm}$ 礫中量・炭混)
 26 10YR3/3暗褐色泥砂 ($\phi 3.0-8.0\text{cm}$ 礫少量・炭混)
 27 10YR4/4褐色泥砂 ($\phi 3.0-5.0\text{cm}$ 礫少量・炭・焼土混)
 28 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 (砂礫・炭少量混) ベース
 29 25Y4/3オリーブ褐色粗砂 (砂礫・炭少量混)
 30 10YR4/4褐色粗砂 + 25Y4/4オリーブ褐色粗砂 (砂礫混) ベース
 31 25Y5/4黄褐色砂礫 (粗礫混) ベース
 32 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 (砂礫混) ベース
 33 25Y4/4オリーブ褐色砂礫 (粗礫混) ベース
 34 25Y4/6オリーブ褐色泥砂 ($\phi 10.0-20.0\text{cm}$ 礫混)
 35 25Y4/3オリーブ褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 36 25Y4/2暗灰黄色泥砂 ($\phi 1.0-10.0\text{cm}$ 礫混) (清193)
- 37 25Y3/1黒褐色泥土
 38 25Y3/2黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-8.0\text{cm}$ 礫混) } 清193
 39 25Y4/1黄灰色泥砂
 40 25Y3/2黒褐色泥砂 (池128)
 41 10YR3/1黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 42 25Y3/1黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 43 25Y3/2黒褐色泥砂 ($\phi 2.0-6.0\text{cm}$ 礫混)
 44 25Y3/2黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 45 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 ($\phi 2.0-10.0\text{cm}$ 礫混・石組の石落ち込む) } 井戸136
 46 25Y4/2暗灰黄色泥砂
 47 5Y4/2灰オリーブ色泥砂 (砂質) } 池128
 48 25Y4/1黄灰色泥土 (炭・焼土混) } 池128
 49 25Y3/2黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-2.0\text{cm}$ 礫混)
 50 25Y4/2暗灰黄色泥砂
 51 10YR3/1黒褐色泥砂 ($\phi 2.0-10.0\text{cm}$ 礫混) (清206)
 52 25Y5/2暗灰黄色粗砂 (固く結まる)
 53 25Y7/6暗灰黄色砂礫 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫)
 54 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
 55 25Y4/4オリーブ褐色砂礫
- 23 25Y4/2暗灰黄色泥砂 ($\phi 1.0-10.0\text{cm}$ 礫多量混)
 24 25Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 25 25Y4/2暗灰黄色泥砂 (砂質)
 26 10YR4/1褐色泥砂 ($\phi 1.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 27 25Y3/2黒褐色泥砂
 28 25Y4/2暗灰黄色泥砂 ($\phi 2.0-5.0\text{cm}$ 礫混)
 29 25Y4/3オリーブ褐色泥砂 ($\phi 5.0-10.0\text{cm}$ 礫混)
 30 25Y3/1黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-4.0\text{cm}$ 礫混)
 31 25Y3/2黒褐色泥砂
 32 25Y4/2暗灰黄色泥砂
 33 25Y4/1黄灰色砂礫
- 12 25Y6/8明黄褐色泥砂 ($\phi 5.0-10.0\text{cm}$ 礫多量混)
 13 25Y2/1黒褐色泥混 (目殺・炭・ $\phi 5.0-10.0\text{cm}$ 礫混)
 14 25Y4/1黄灰色泥砂
 15 25Y4/3オリーブ褐色泥砂 ($\phi 1.0-4.0\text{cm}$ 礫多量混)
 16 10YR4/4褐色泥砂
 17 25Y3/1黒褐色泥砂
 18 25Y3/2暗オリーブ褐色泥砂
 19 25Y3/2黒褐色泥砂 ($\phi 3.0-12.0\text{cm}$ 礫多量混)
 20 25Y4/3オリーブ褐色泥砂 (炭混)
 21 25Y4/1黄灰色泥砂
 22 25Y4/1黄灰色泥砂
- 34 25Y4/2暗灰黄色泥砂
 35 25Y3/1黒褐色泥砂
 36 25Y3/1黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-4.0\text{cm}$ 礫混)
 37 25Y4/1黄灰色泥砂 ($\phi 1.0-2.0\text{cm}$ 礫混)
 38 25Y4/1黄灰色泥砂 ($\phi 1.0-4.0\text{cm}$ 礫混)
 39 25Y4/1黄灰色泥砂 ($\phi 1.0-2.0\text{cm}$ 礫混)
 40 25Y4/1黄灰色泥砂 (砂質)
 41 25Y4/1黄灰色泥砂 (砂質)
 42 25Y3/1黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-4.0\text{cm}$ 礫混)
 43 10YR3/2黒褐色泥砂 ($\phi 1.0-8.0\text{cm}$ 礫多量混)
 44 25Y3/1黒褐色泥砂
 45 10YR6/6明黄褐色 + 10YR4/4褐色砂礫 (ベース)

図6 西壁・北壁断面実測図 (1/100)

南壁



西壁(南西部)



北壁(南西部)

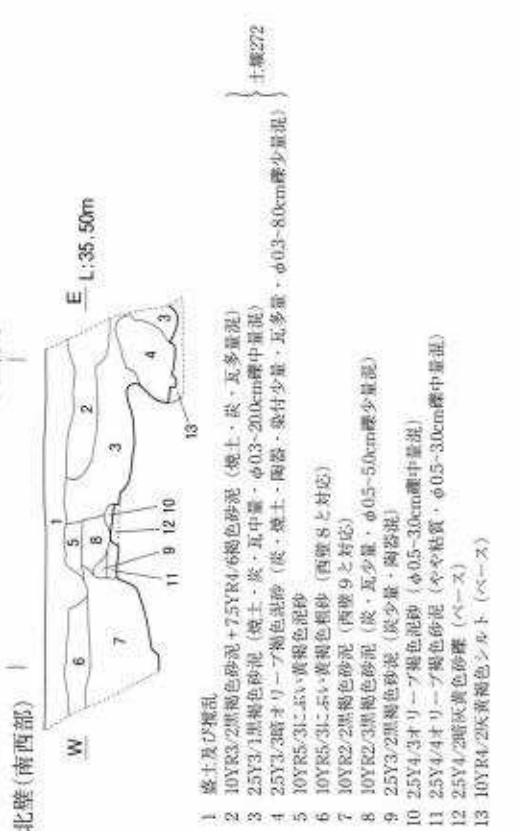


図7 南壁・西壁(南西部)・北壁(南西部)断面実測図 (1/100)

Ⅱ 遺 構

調査地は敷地全体に盛土が0.4m程あり、その下は江戸時代末期の焼土層が敷地全域にわたって頻繁に認められる。この焼土層は蛤御門の変（1864年）に伴う焼土層である。京都市中の大半に及んだその火災は、大量の毀損した焼け瓦を生じ、当時それらは深く穴を掘って埋め立てて処理したため、それ以前の遺跡の多くが破壊を受ける原因となっている。本調査地においても広範囲にわたって損壊を受けている状況であった。

調査区の基本層序は、地表下0.7mまで江戸時代の土層があり、その下に室町時代の整地層（整地層②～④）が0.5～0.6mの厚さで3層ほどある。整地層②は「本能寺の変」後の本能寺再建時の整地層、整地層③は本能寺城築造に伴う整地層、整地層④は当初の本能寺建立に伴う整地層と考えられる。なお、室町時代の整地層上面の標高は北端部で35.8m、南端部で35.0mを測る。

検出した遺構には平安時代後期から近代のものがあり、遺構の総数は419基を数える。遺構の種類としては、平安時代後期の土塋跡、室町時代の土塋、掘立柱、井戸、溝、池跡、江戸時代の土塋、溝、井戸、土取跡、そして近代の井戸跡などがある。以下主要な遺構について述べる。

平安時代から鎌倉時代

平安・鎌倉時代の土器・瓦類は後世の遺構に混じって少量出土しているが、検出した遺構は平安時代後期の土塋1基である。

土塋392（図16・図版7の2）

調査区南西隅部に位置する。南北長1.6m、東西長0.7m以上、深さ0.2m測る。東側を近世の土塋によって削平を受けている。埋土の暗オリーブ褐色砂泥層からは遺物箱1箱程の11世紀後半の土器類が出土した。土器類はほとんどが土師器皿で細かく砕かれた状況であった。

室町時代

今回の調査では検出した遺構の大半がこの時代のものである。とくに15世紀から16世紀後半にかけての遺構群が良好な状態で遺存していた。

土塋237（図16・図版3の1・4の2）

調査区北東部に位置する。西洞院川（溝411）拡幅時に東半分が削平を受けている。南北長1.5m、東西長0.7m以上、深さ0.4mを測り、掘形は楕円形に近い。埋土は3層に分層され、下層の炭層と共に多量の土師器皿が出土した。土師器皿の多くは完形品であり、火葬墓あるいは祭祀的な遺構の可能性がある。

柵列群（図15・16・18・図版2の2・3の1・7の1）

西洞院川西岸に沿って南北方向の掘立柱の柵列群を検出した。いずれも径0.25～0.4mの円形の掘形をもち、その半数ほどが根石をもつ。とくに十五町の北東隅部（西洞院大路と六角小路の

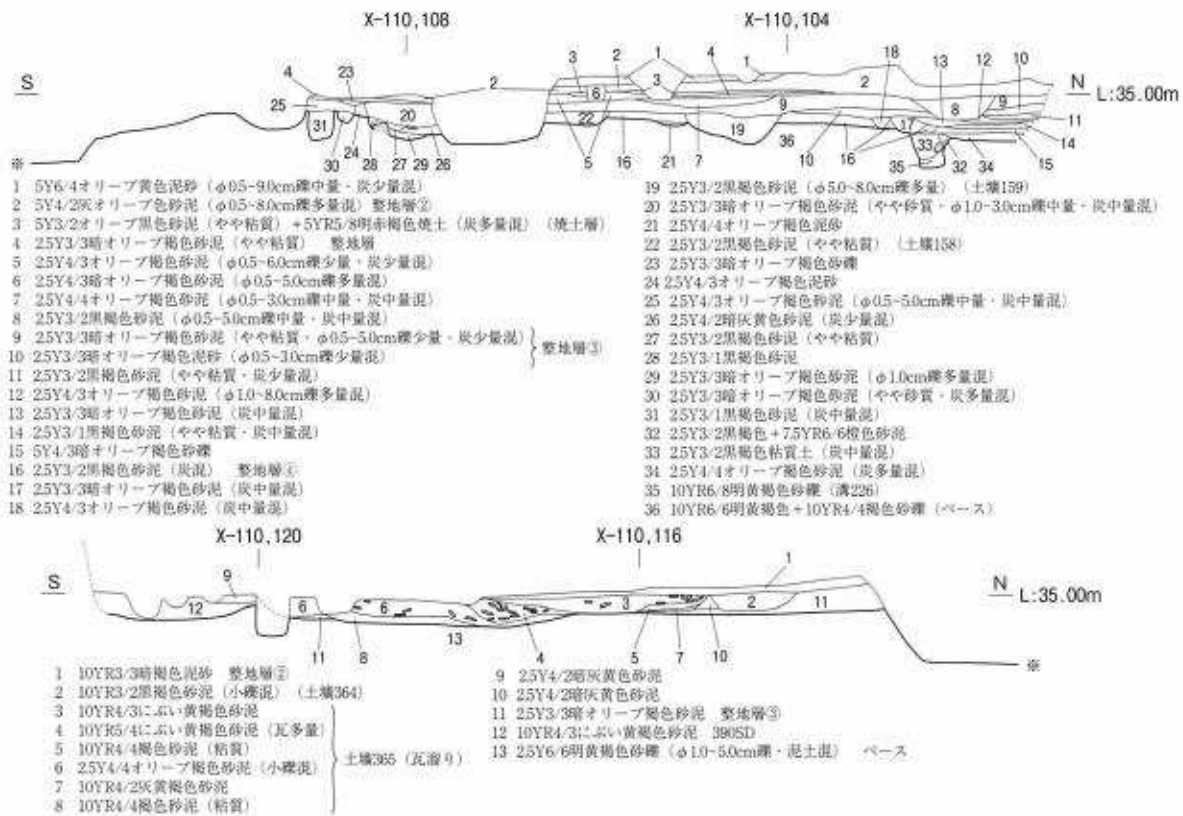


図8 南北断面 (Y-22,362mライン) 実測図 (1/80)



図9 東西断面 (X-110,112mライン) 実測図 (1/80)



図10 池128南北断面実測図 (1/80)



図12 土壌355・柱穴381断面実測図 (1/80)

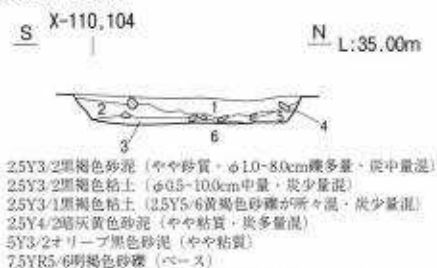


図11 溝193断面実測図 (1/80)



図13 溝206断面実測図 (1/80)



交差点南西角)では頻繁に建て替えがおこなわれた状況を呈する。

溝206 (図13・16・図版3の1・7の1)

調査区中央部に位置する。最終面で検出した。六角小路南築地推定線と西洞院西築地推定線のほぼ内側に沿うL字形の溝である。幅1.0~1.5m、深さ0.3mを測る。十五町の築地内溝と考えられる。

溝411 (図9・15・16・図版3の1・4の1)

調査区東端部を南北方向に貫く溝で、西洞院川である。西肩部のみ幅2~3m程検出した。中央東西断面図(図9)の西洞院川西肩部の第10・11層は16世紀前半の土師器皿を含む。当初の本能寺建立に伴い西洞院川西肩部を整備したものと考えられる。東壁断面図(図5)の第57~63層は西洞院川が機能していたときの堆積土である。第55層は西洞院川を埋め立てた土層である。第57層からは16世紀後半の土師器皿が出土しており、本能寺城築造に伴い西洞院川の西肩部を埋めて整地したことがうかがえる。

溝193・230 (図8・11・16・図版3の1・4の1)

調査区北辺部に位置する。東西方向の溝である。六角小路南築地推定線より北側に位置し、東側は暗渠(溝230)となって溝411(西洞院川)に注ぎ込む。溝411は幅2.5m、深さ0.3mを測り、暗渠の部分は幅0.5mと狭くなり、暗渠の長さ3mを測る。暗渠は西洞院大路西築地推定線の延長線上にある。溝411の底より多量の瓦器の羽釜が出土した。また、溝の中央部に径1.1m、深さ0.3mの円形の落ち込み(土壌229)があるが、溝193に付随する施設と考えている。

土壌159 (図8・15・図版2の2)

調査区中央北部に位置する。整地層④上面で成立する。南北長1.1m、東西長0.9m、深さ0.3mを測り、楕円形の掘形をもつ。掘形内に多量の礫を含む。何らかの地業の跡とみられる。

井戸352 (図15・19・図版6の1・8の2)

調査区南辺部のやや西よりに位置する。石組井戸である。掘形は径2.6~2.7mの円形を呈し、深さ2.6mを測る。井筒は0.2~0.5mの川原石を円形に組み、内径1.2mを測る。石組は三段分残存する。井戸底に一辺0.9m、高さ0.18mの方形の木枠を据える。木枠の下に曲げ物を据えたような痕跡が認められるが、井筒の中心部よりずれており、あるいは作り替えに伴うものかも知れない。木枠上面に厚さ2~3cmの炭化物堆積層が認められ、本能寺城焼亡に伴う堆積層と考えられる。井戸底の標高は33.0mである。この井戸は当初の本能寺建立時に掘られたものである。

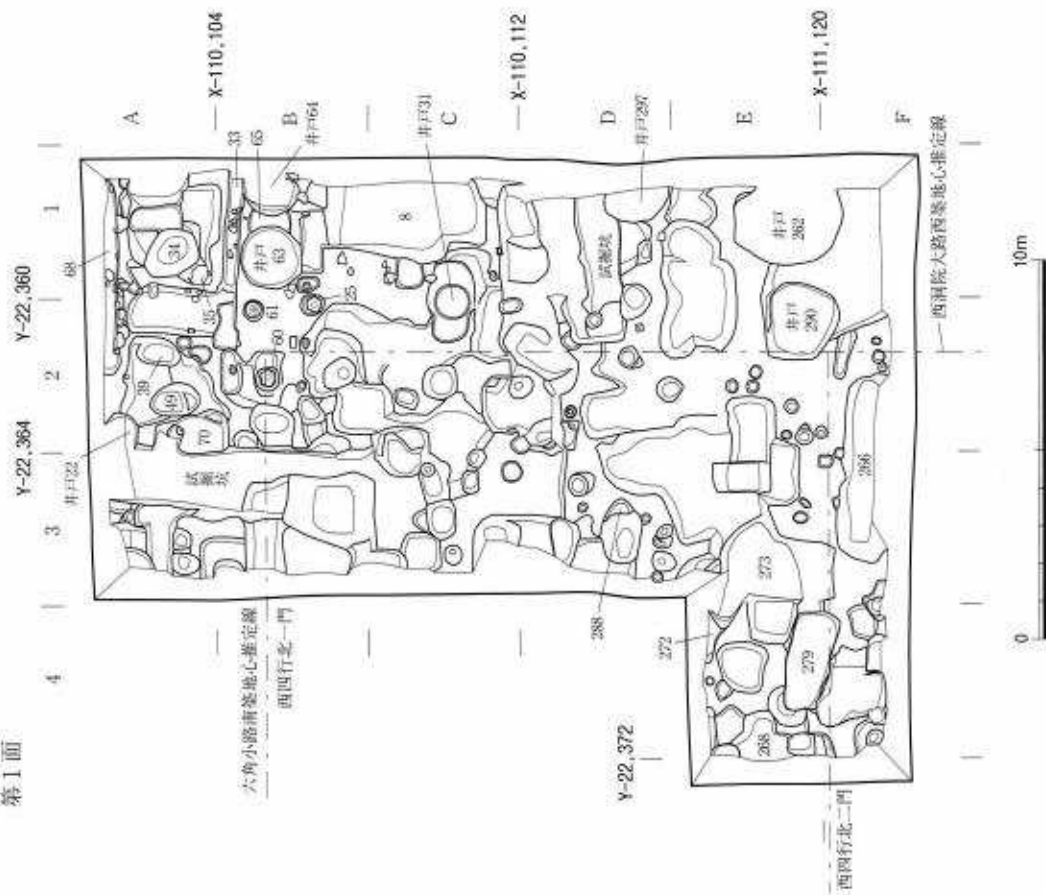
土壌365 (図8・15・図版6の1)

調査区中央南部に位置する。南北長4.7m、東西長2.4mの不定形を呈し、深さは0.4mを測る。掘形内に多量の瓦を含む。瓦には二次焼成を受けたものがかなりある。軒丸瓦2点、軒平瓦3点出土した。軒平瓦は3点とも同範で、その1点の平瓦部凹面に「天」の字のヘラ書きがある。

池128 (図9・10・15・図版2の1・6の1)

調査区中央西半部に位置する。整地層②の下面で成立する。南北長10m、東西長4m以上で、西壁の調査区外に延びていく。深さ0.5mを測り、堆積土は5・6層に分層でき、池底はシルト

第1面



第2面

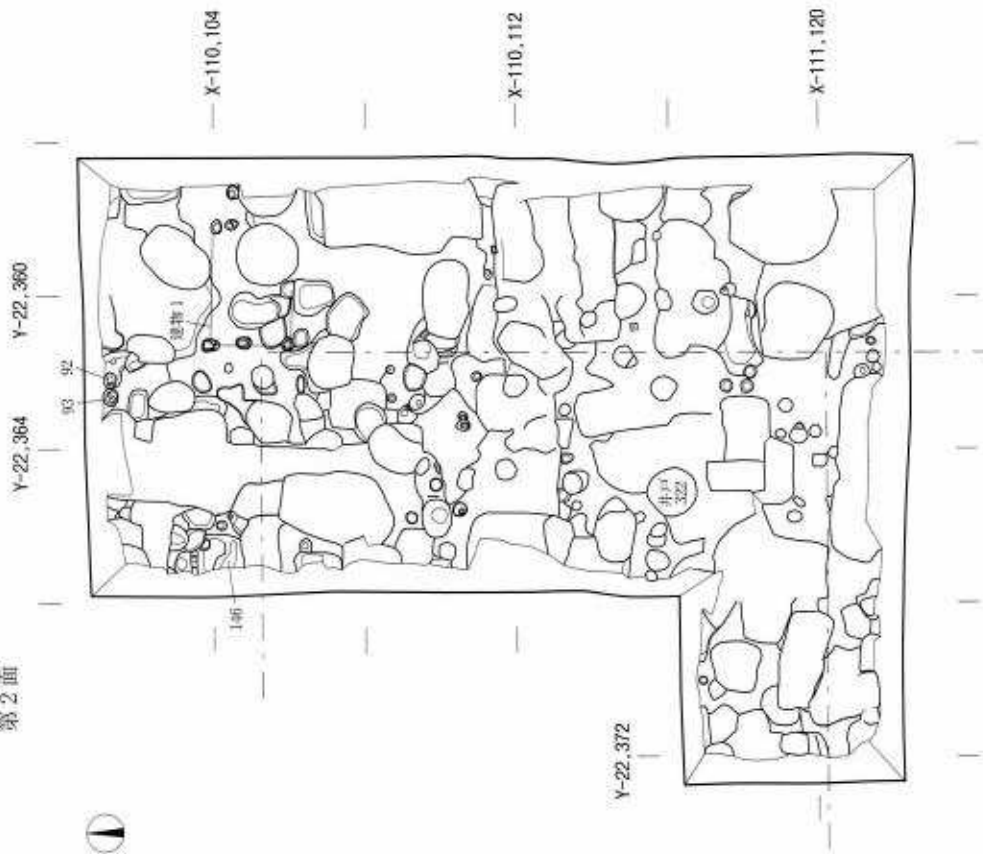


图14 第1・2面遺構実測図 (1/200)

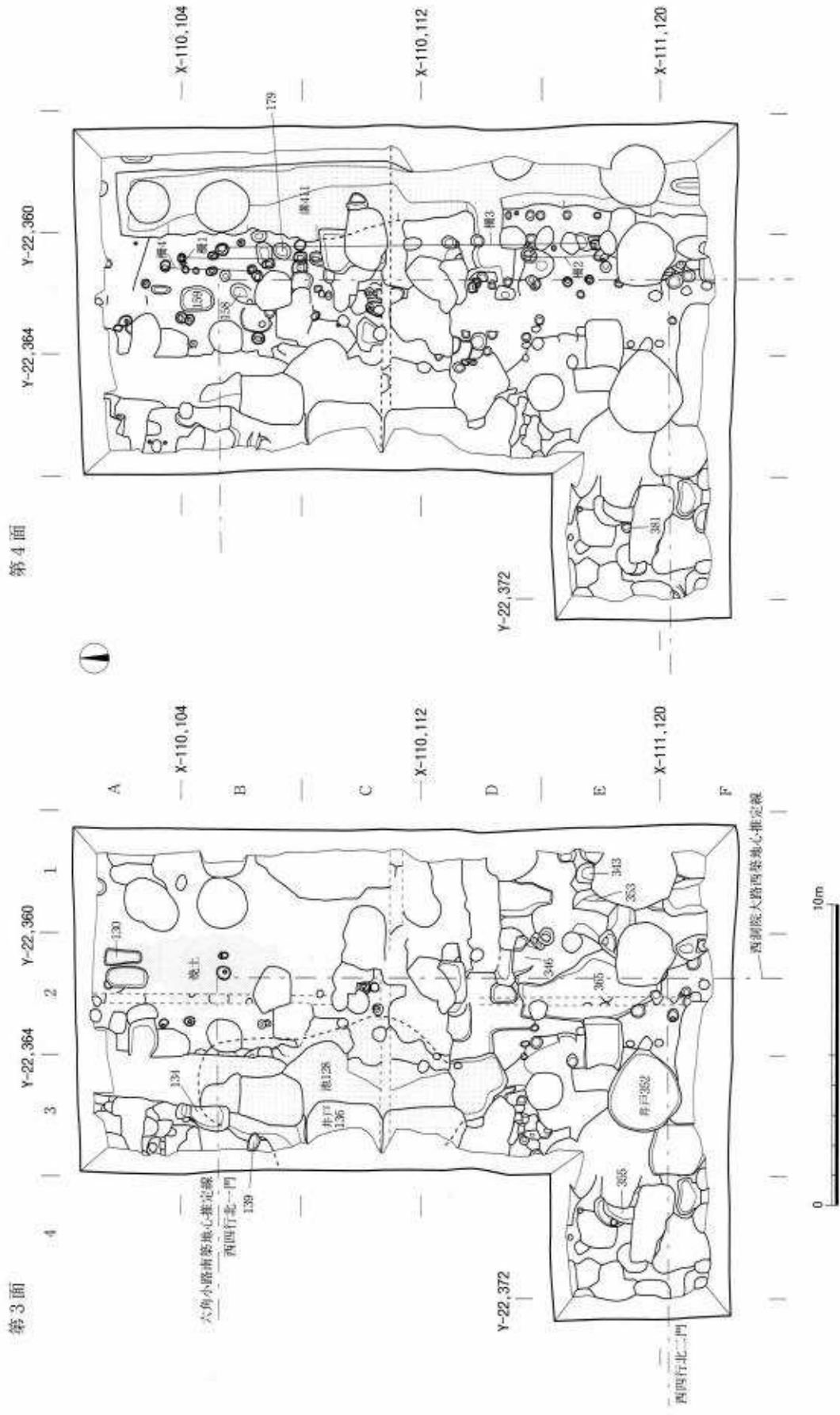


图15 第3·4面遺構実測図 (1/200)

第5面

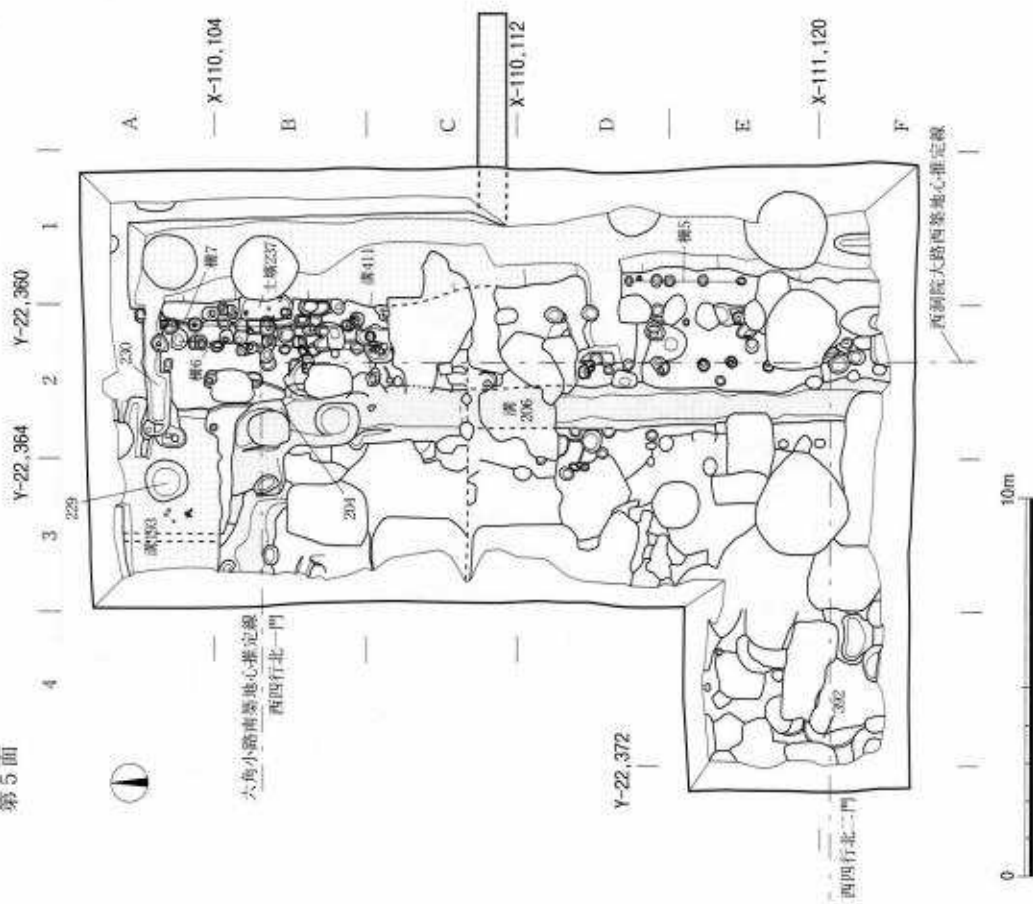


图16 第5面遺構実測図 (1/200)

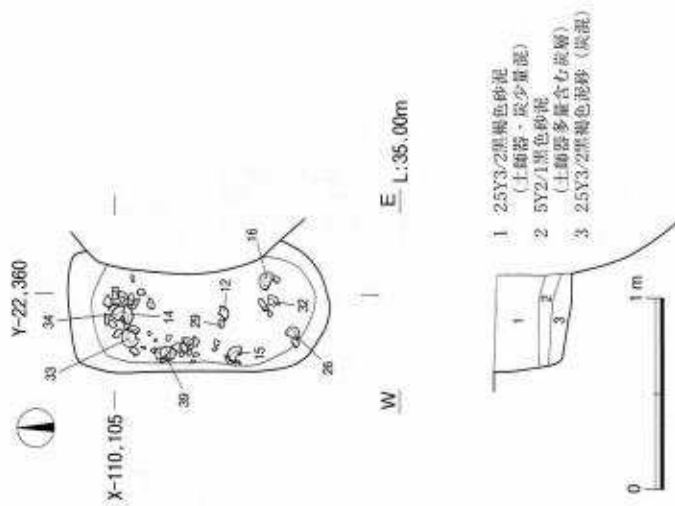


图17 土壙237実測図 (1/40)

が堆積する。シルト上面に炭化物と焼土の堆積層が認められた。調査当初、攪乱断面より平安時代後期の遺物が出土し藤原実季の時代のものと考えたが、混入品であることが明らかになり、また層位的に室町時代後期の遺構と判明した。

井戸136 (図15・19・図版2の1・3の2)

調査区中央西端部に位置する。池128を掘り込んで成立する。石組井戸である。掘形は南北2.5m、東西長1.5m以上を測り、方形ないし円形の掘形をもつ。井筒の石組は二段ほど残存する。井戸底に一辺0.8mの方形の木枠を据える。井戸352と規模及び構造が酷似しており、「本能寺の変」後の本能寺再興に伴う井戸352の作り替えと考えられる。なお、掘形の大半が調査区の西壁外の隣地に及ぶため、主として壁面での観察にとどめ、埋め戻し時に機械力によって井戸底と遺物の検出に努めた。

土壌346 (図15・図版6の1)

土壌365の北東部に位置する。掘形内より五輪塔の火輪1点が出土した。埋土は暗オリーブ褐色砂泥層である。

江戸時代以降

北半部で江戸時代中期から後期の鋳造遺構、便所遺構、建物跡など良好な状態で検出した。

井戸322 (図14・19・図版5の1・8の1)

調査区南部の西よりに位置する。石組井戸である。径1.35mの円形の掘形をもつ。井筒は花崗岩の割石を含む川原石を積み上げ、9段分ほど残存する。内径は0.8m程である。井戸底に一辺0.7m、高さ0.24mの方形の木枠を据える。井戸底の標高は33.55mである。

建物1 (図14・20・図版1の2)

調査区北部の東よりに位置する。南北2間、東西2間分検出した。南北の柱間1~1.1m、東西の柱間1.5mを測る。いずれも根石をもつ。

土壌353 (図15・図版6の1)

調査区南東部に位置する。南北長1.4m、東西長0.7m、深さ0.4mを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂泥層である。

土壌343 (図15・図版6の1)

土壌353の東側に位置する。東西長0.75m、南北長0.6m、深さ0.5mを測る。埋土は黒褐色砂泥層である。

土壌130 (図15・図版2の1)

調査区北辺部に位置する。南北長1.2m、東西長0.4~0.55m、深さ0.1mを測る。第2面の堀残しである。江戸時代中期の遺物を含む。

土壌70 (図14・図版1の1)

調査区北部の西よりに位置する。南北長1.4m、東西長1.0m、深さ0.7mを測る。埋土は灰黄褐色砂泥、黒色砂泥層の上下2層に分層できる。

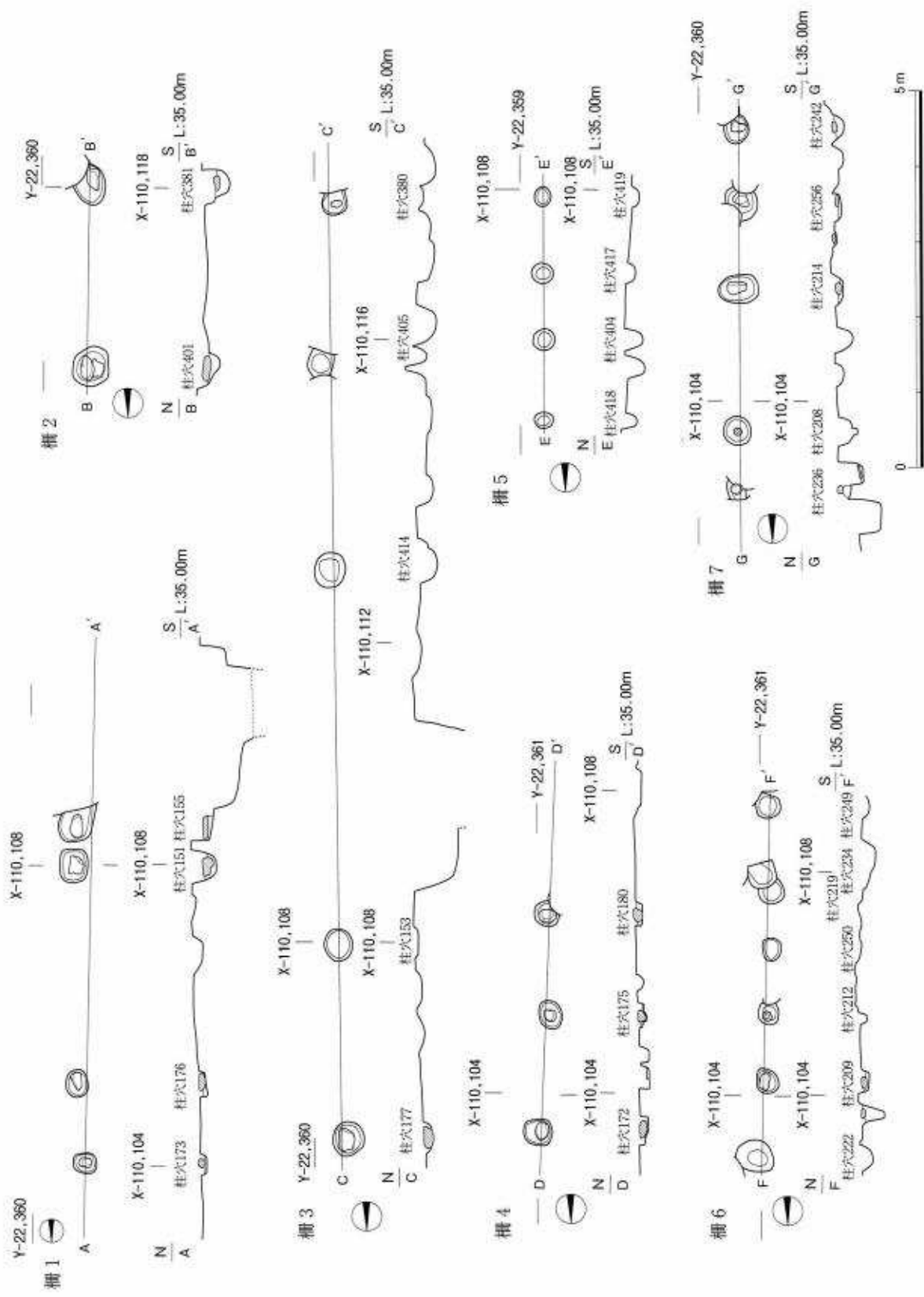


图18 榻 1~7实测图 (1/80)

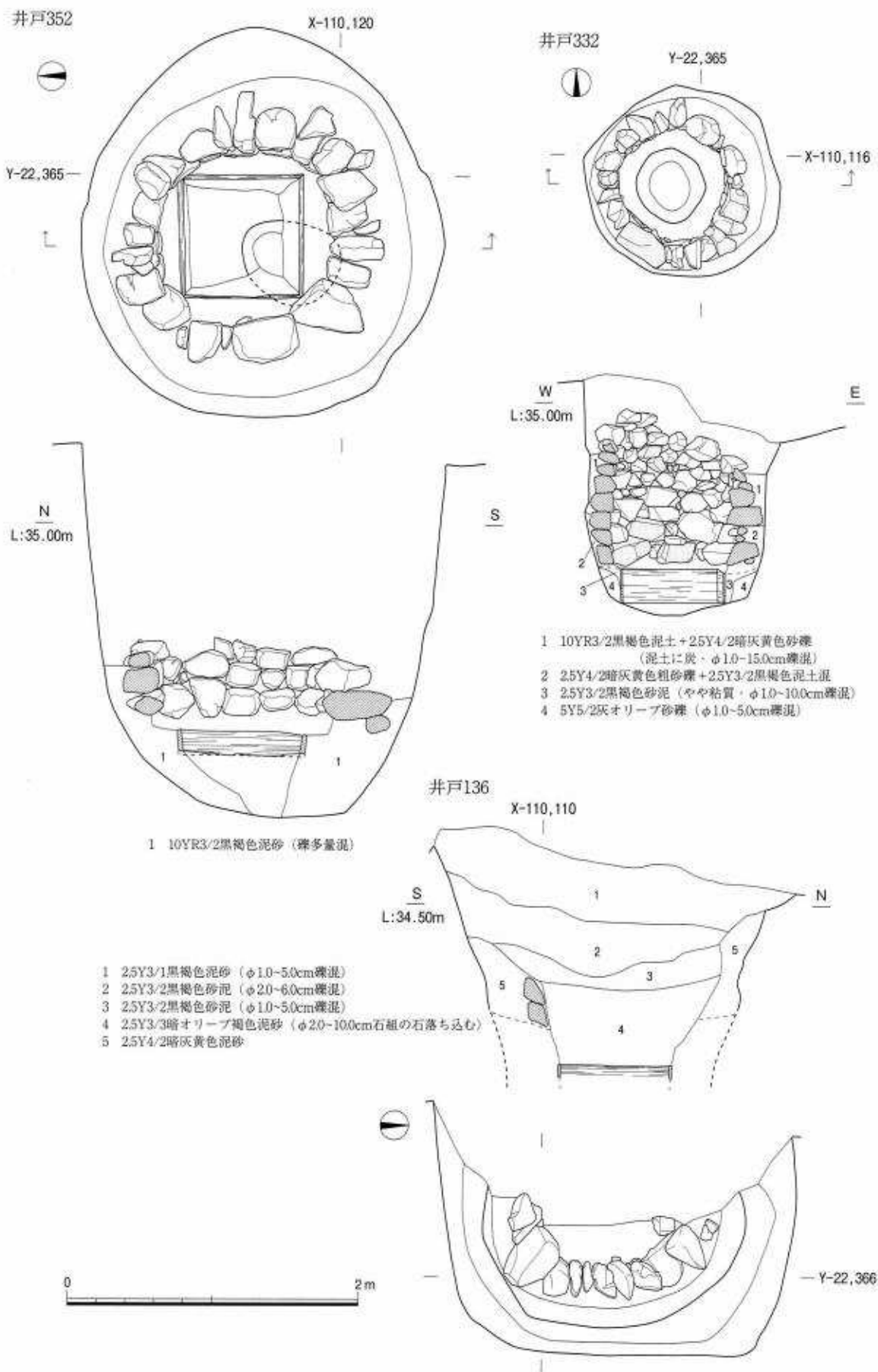


図19 井戸352・332・136実測図 (1/40)

土壌39・49・65 (図14・図版1の1)

調査区北部に位置する。掘形内より埴埴や鉄滓片が出土しており、鑄造遺構である。65は掘形壁面が堅く赤変する。江戸時代後期。

溝33 (図14・図版1の1)

調査区北部の東よりに位置する。漆喰で作られた溝状遺構である。江戸時代後期。

土壌35 (図14・図版1の1)

調査区北東隅部に位置する。焼け瓦溜まりにより一部が削平を受ける。大甕を据える。

土壌25・60 (図14・図版1の1)

調査区北部に位置する。いずれも甕を据えた状況を呈する。トイレ遺構である。江戸時代後期。

土壌61 (図14・図版1の1)

トイレ遺構の北に位置する。播鉢の完形品を据える。鉢底に孔を穿つ。土壌25・35・60のトイレ遺構に関連する手水鉢脇の排水施設の可能性が考えられる。

井戸22・31 (図14・図版1の1)

いずれも漆喰井戸である。江戸時代末期。

土壌8・34・266・268・272・273・279 (図14・図版1の1・図版5)

すべて焼け瓦溜まりである。いずれも棧瓦を含む。266・272・273・279は掘形が袋状を呈し、土取穴に焼け瓦を埋めた状況を呈する。273・279は焼け瓦を埋めたのち堅く整地をおこなう。

井戸262・297 (図14・図版5の1)

調査区の南東部に位置する。石組井戸である。いずれも近代の井戸である。

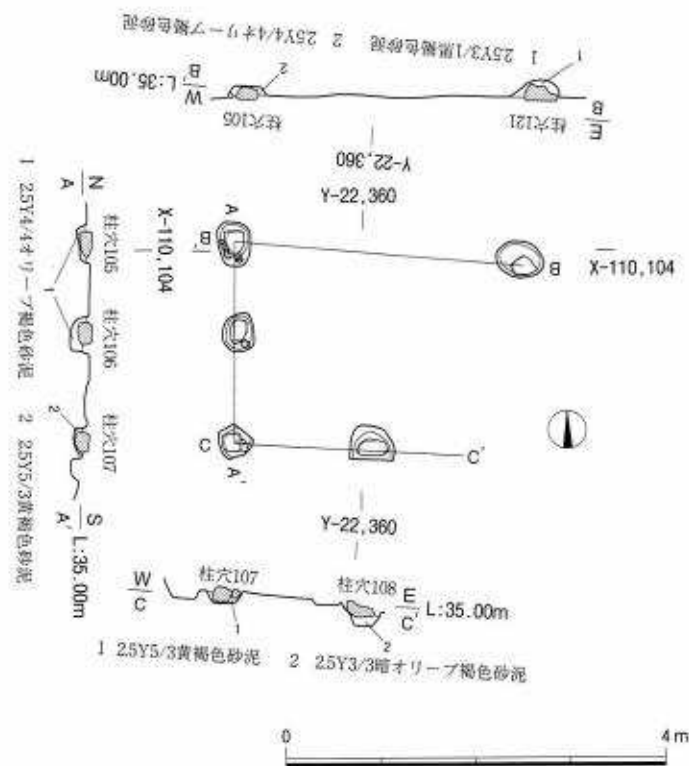


図20 建物1実測図 (1/80)

Ⅲ 遺 物

出土した遺物は整理箱に74箱ある。時代は平安時代後期から近代までのものがあり、大半が室町時代に属する。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概説する。

なお、時代区分は平安京の土器編年^{註2}をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

土壙392出土土器 (図21)

土師器 (1~10)、白磁などがある。土師器には皿A (1、2)、皿Ac (3~5)、皿N (6~10) がある。皿Nは口縁部を二段にナデ、口縁端部は外反する。11世紀後半の特徴を有する。

土壙237出土土器 (図22・図版9)

土師器 (11~40)、青白磁 (41)、陶器、瓦器などがある。土師器皿には皿N (11~20)、皿Nh (24)、皿Sh (21~23)、皿S (25~40) がある。31の内面には絵画風の墨書がある。青白磁 (41) は内面に蓮弁の型彫りを施す。小皿あるいは蓋になろうか。Ⅷ期の15世紀前半頃のものである。

柵1・4・6・7出土土器 (図23・図版9)

柵1の皿N (42) は柱穴151、皿S (43) は柱穴155出土。柵4の土師皿Sh (44) は柱穴180出土。柵6の皿N (45)、皿S (48) は柱穴219出土、皿S (46、47) は柱穴234出土、皿S (49) は柱穴222出土である。柵7の皿N (50) は柱穴208出土、皿S (51) は柱穴214出土、備前焼の甕 (52) は柱穴236出土である。これらの土器群は15世紀後半から16世紀前半にかけてのものである。

溝206出土土器 (図24・図版10)

土師器 (53~57)、瓦器 (58、59)、陶器 (60)、青磁 (61) がある。土師器には皿N (53、54)、皿S (55~57) がある。瓦器の羽釜は59の鐙が断面三角形を呈するのに対して、56は断面長方形を呈する。60は黒釉の陶器皿である。青磁碗 (61) は内面に劃花文を施す。釉薬はオリーブ色を呈し、内外面とも細かな貫入が認められる。高台内面は無釉である。16世紀前後のものである。

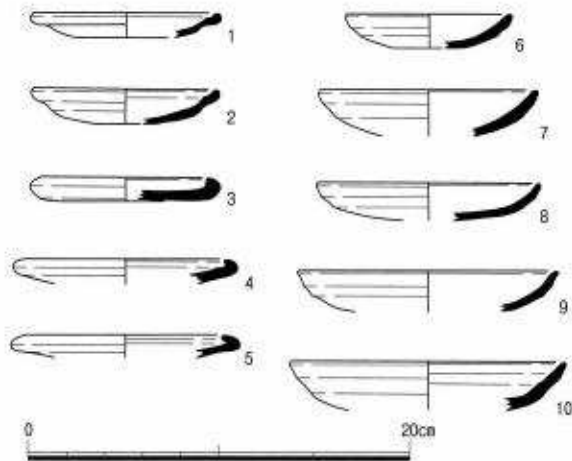


図21 土壙392出土遺物実測図 (1/4)

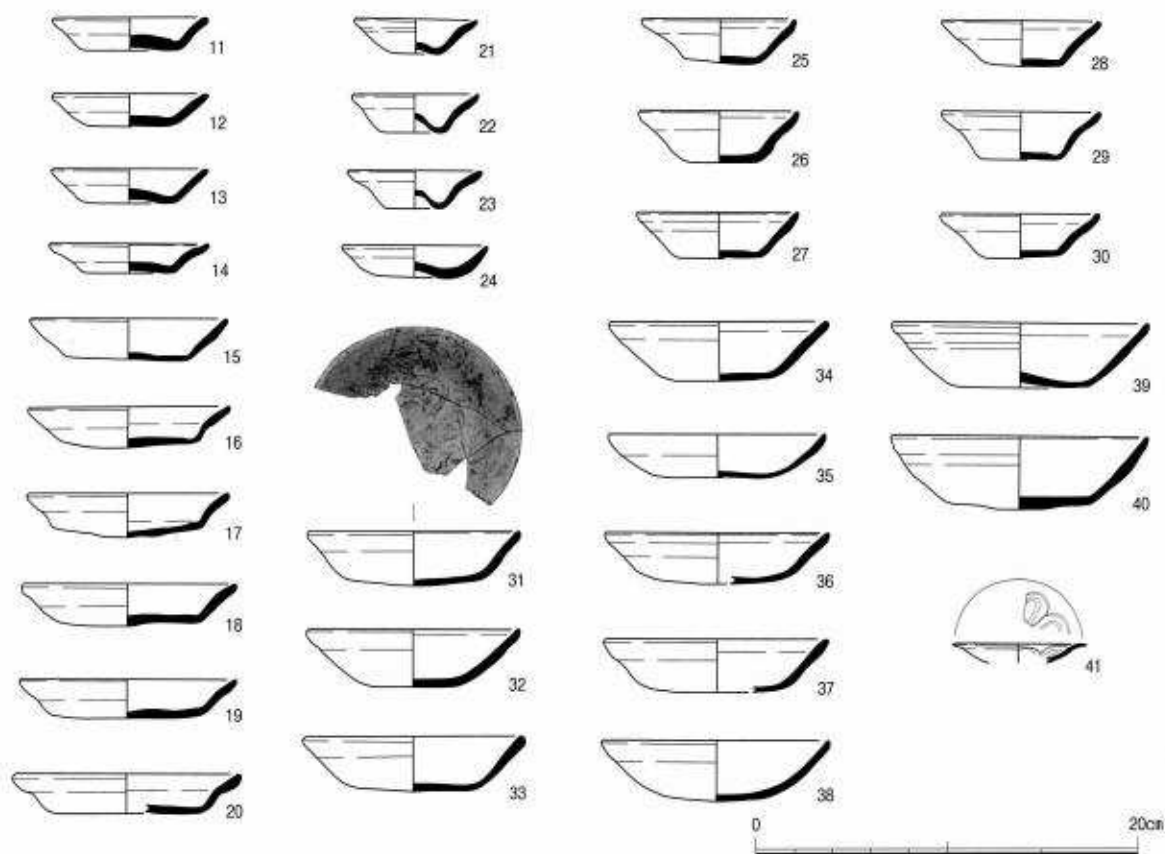


図22 土壙237出土遺物実測図 (1/4)

溝411出土遺物 (図25・図版10)

土師器皿N (62)、土師器皿Sh (63、64)、土師器皿S (65~73) などがある。65~67・71・72は口縁端部に炭化物の付着が認められる。62~65は北壁第10層 (図9) より出土。73は東壁 (図5) 第55層 (溝411埋土) 出土、69・71・72は東壁第57層出土、70は東壁第58層出土、66・68は東壁第61層出土、67は東壁第26層出土である。71・72は底部内面に強くヨコナデすることによって生じた圈線が認められる。69とともに出土している土師器皿の底部片には明確な圈線が認められるものがある。これらの土器群はX期の古~新までの全域にわたり、16世紀前半から16世紀後半までの年代が与えられる。

溝193出土土器 (図26・図版10)

遺物箱2箱ほどの多量の瓦器の羽釜が出土した。土師器皿N (74~77)、土師器皿Sh (78)、土師器皿S (79~91)、瓦器羽釜 (94~100)、備前焼甕 (93)、陶器碗 (92) などがある。土師器皿85・88~90は底部内面に浅い圈線が認められる。瓦器羽釜の鏝は断面三角形を呈する。92はオリーブ灰色の釉を施す。内外面共に貫入が認められる。16世紀前半から16世紀半ば頃の土器群である。X期古~中。

土壙159出土土器 (図27)

土師器皿S (101)、青磁碗 (102)、瓦器などがある。102は体部外面に蓮弁文を施す。

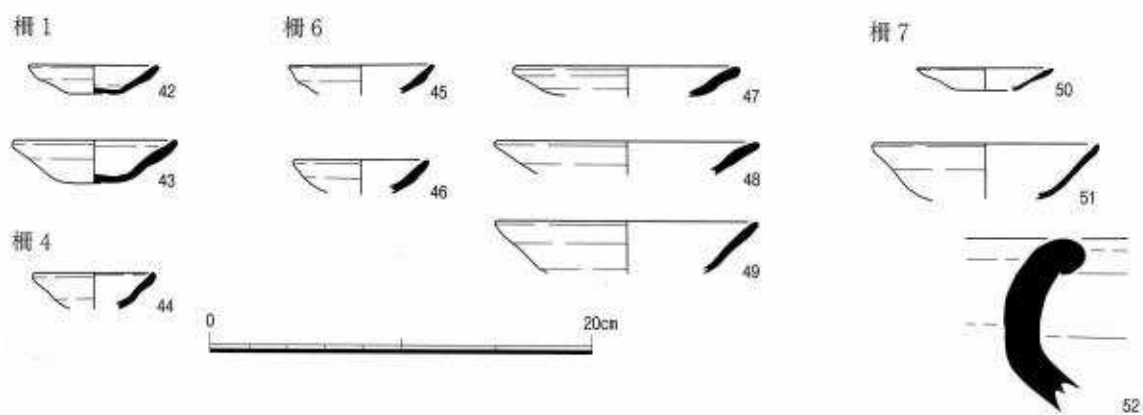


图23 柵1·4·6·7出土遺物実測図(1/4)

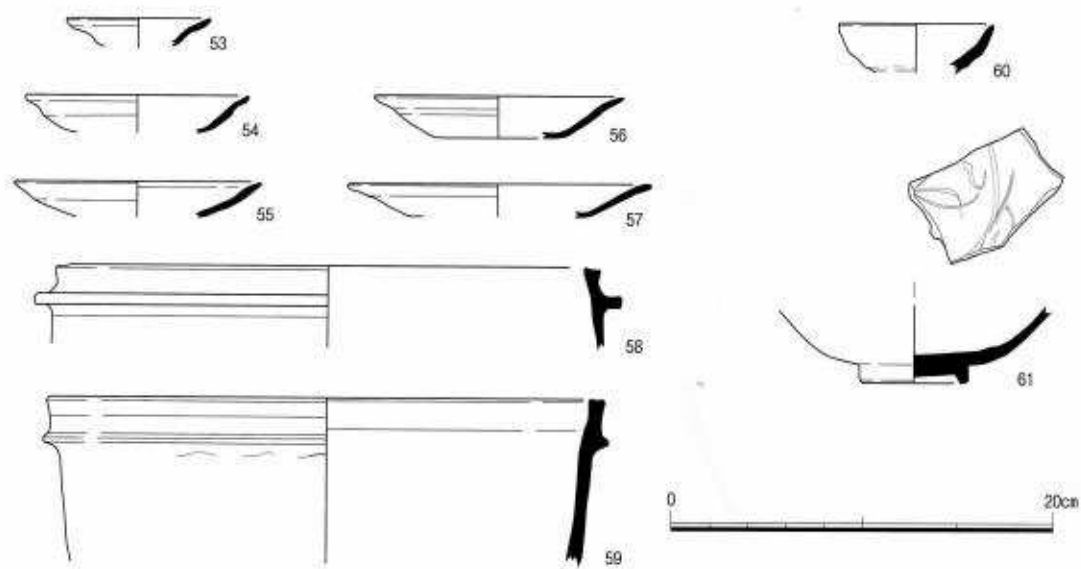


图24 溝206出土遺物実測図(1/4)

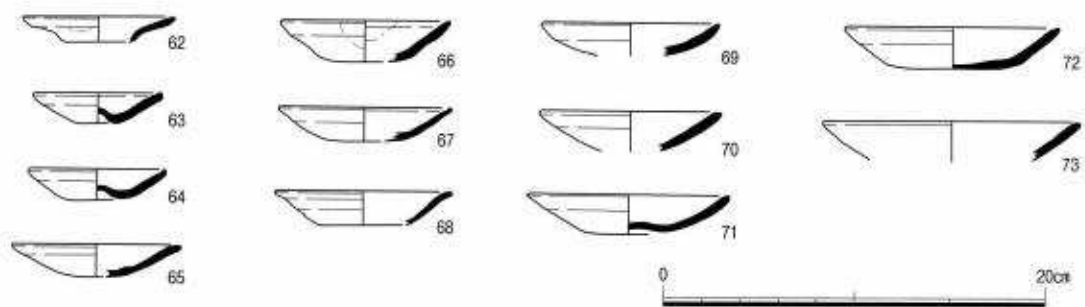


图25 溝411出土遺物実測図(1/4)

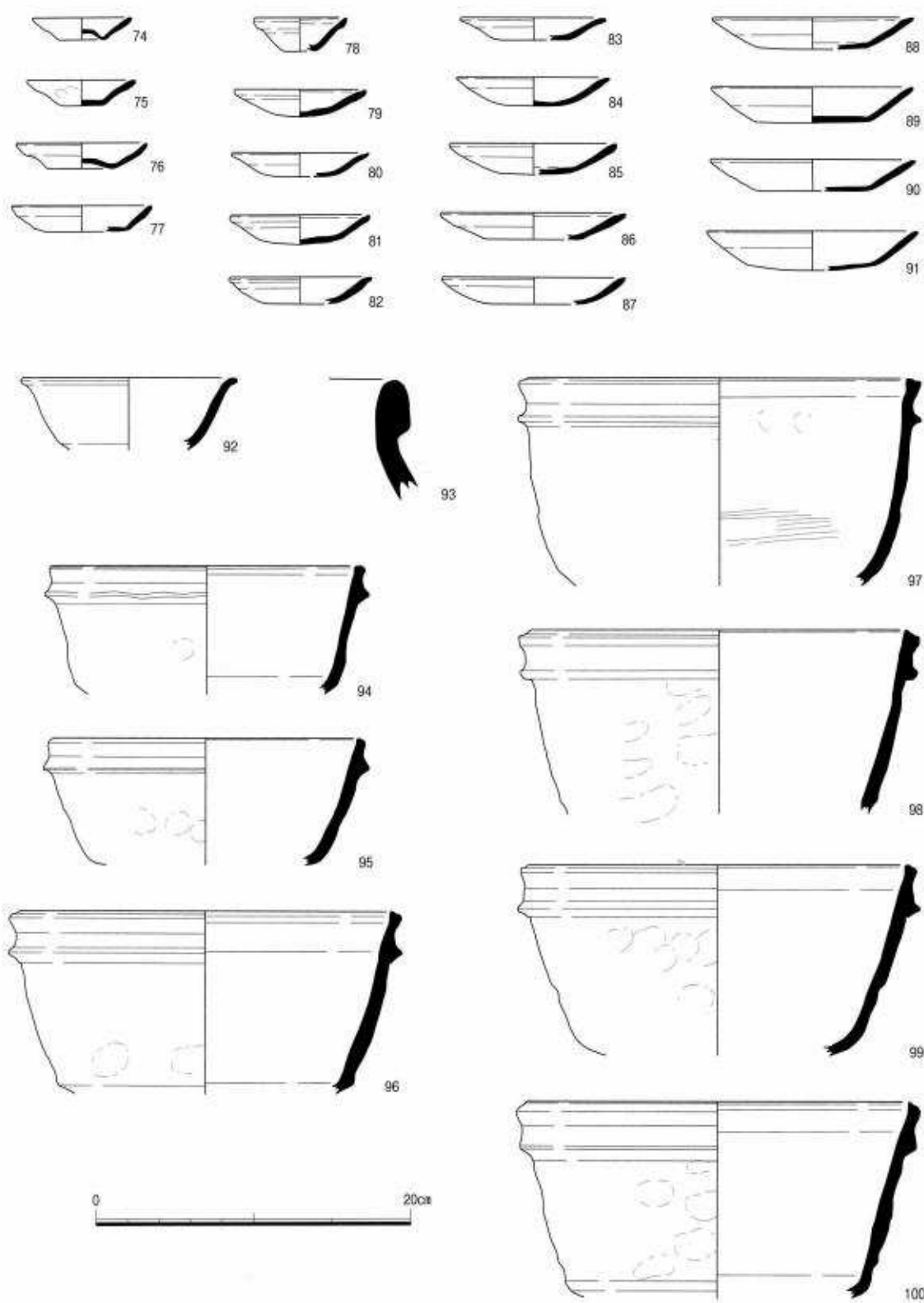


图26 沟193出土遗物实测图 (1/4)

井戸352出土土器 (図27・図版11)

土師器皿S (103)、灰釉折縁皿 (104、105)、白磁碗 (106)、青磁皿 (107) は石組上面の埋土出土、土師器皿S (108、109) は石組内第1層出土、土師器皿S (110~112)、灰釉陶器皿 (113)、白磁皿 (114)、青磁碗 (115) は石組内第2層出土、土師器皿N (116、117) は石組内第3層出土、土師器皿N (118、119) は石組内第4層出土、土師器皿S (120、121) は石組内最下層出土である。103はやや厚めの体部をもつ。104・105は美濃瀬戸系の小皿。104の内面底部には重ね焼き痕が明瞭に残る。大窯Ⅳ期のものである。106は内面底部に赤絵(草花文?)を施す。疊付け部及び高台内面は釉を削り取る。107は赤褐色の生地に暗オリーブ色の釉を施す。高台内底部は無釉である。108・110・112・118・120・121の土師器皿の口縁端部には炭化物が付着する。灯明皿として使用されたものである。113は須恵質の胎土をもち、内面全体に灰釉を施す。底部外面には糸切り痕が残る。114の白磁皿は高台部を四方に削り取り4脚風に高台部を作る。内面底部に4脚の重ね焼き痕が認められる。内外面の全面に釉を施し、細かな貫入が全面に認められる。115は青磁の碗あるいは鉢である。灰オリーブの釉を厚く施す。焼き台の痕跡が高台内部に認められる。胎土は灰白色で底部の一部が赤化する。

土壙365出土土器 (図27)

土師器、瓦器鍋、焼締陶器、明染付、白磁などがある。土師器には土師器皿N r (122)、土師器皿S (123~126)がある。123の体部はかなり厚くXI期の特徴を示す。

整地層②出土土器 (図27・図版11)

白磁碗 (127) は乳白色の釉を施し、外面の体部以下は無釉である。底部外面に○に「大」の字の朱書きがある。

池128出土土器 (図27)

土師器皿N r (128)、土師器皿S (129、130)、白磁碗 (131)がある。白磁はややオリーブ色がかった釉を施す。128を除き、いずれも混入品である。

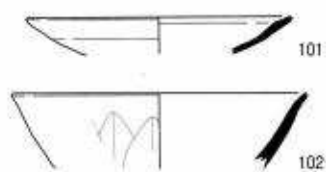
井戸136出土土器 (図27)

土師器皿S (132)、天目茶碗 (133)、施釉陶器碗 (134)などがある。132は小破片のため、口径が少し広がる可能性がある。133の天目茶碗の高台は体部下半を削り出して成形する。浅い輪高台を呈する。体部外面下半を除き黒褐色の釉を厚く施す。134は絵唐津陶器である。高台は削り出し、高台内はヘラ削りの痕が螺旋状に認められる。内面底部に黒褐色の絵付けで模様を施す。

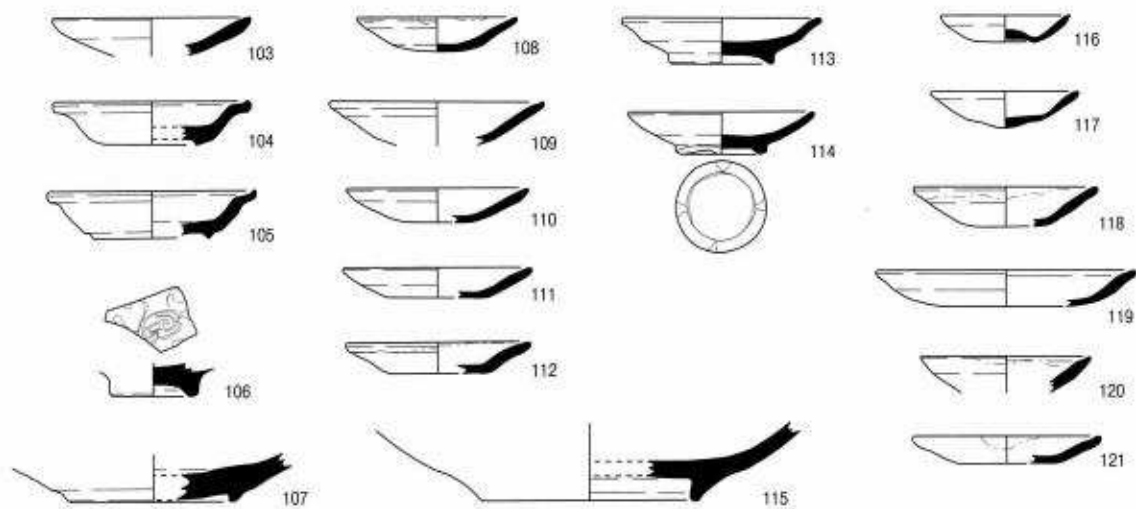
井戸322出土土器 (図28・図版11)

土師器皿N r (135)、土師器皿S (136)、施釉陶器碗 (137)、瓦器鉢 (138)、瓦器羽釜 (139)などがある。136の底部内面はヨコナデにより浅く凹む。137は三島手の小碗である。内外面を全面施有する。輸入品の可能性がある。138は瓦器の小鉢である。体部外面をタテ方向に磨く。139はいわゆる大和型羽釜である。内彎する長い口頸部をもち、口縁部は肥厚する。口縁端部上面は平坦面をもつ。口縁部外面に二条の凹線を施す。体部外面は指押さえで成形したあとヨコナデで

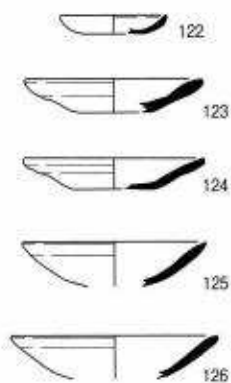
土城159



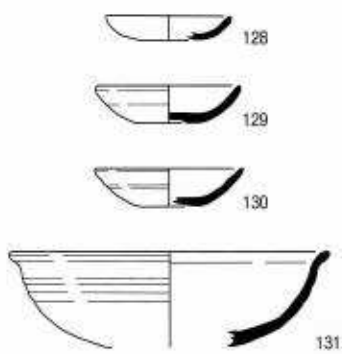
井戸352



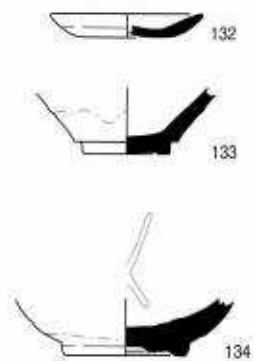
土城365



池128



井戸136



整地層②

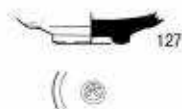


图27 土城159・井戸352・土城365・池128・井戸136・整地層②出土遺物実測図 (1/4)

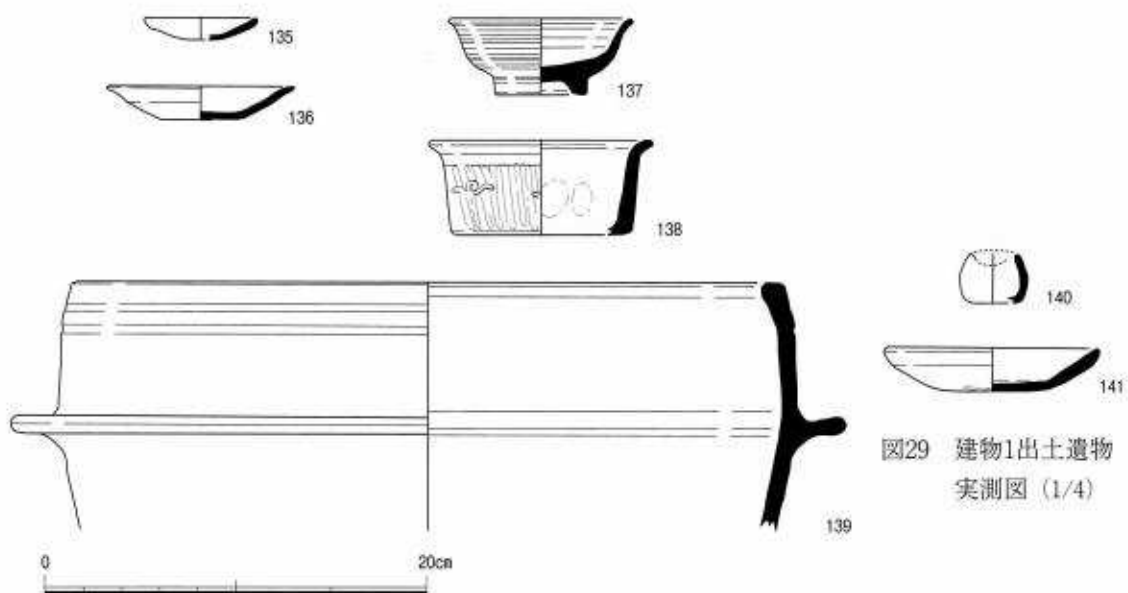


图29 建物1出土遺物
実測図 (1/4)

图28 井戸322出土遺物実測図 (1/4)

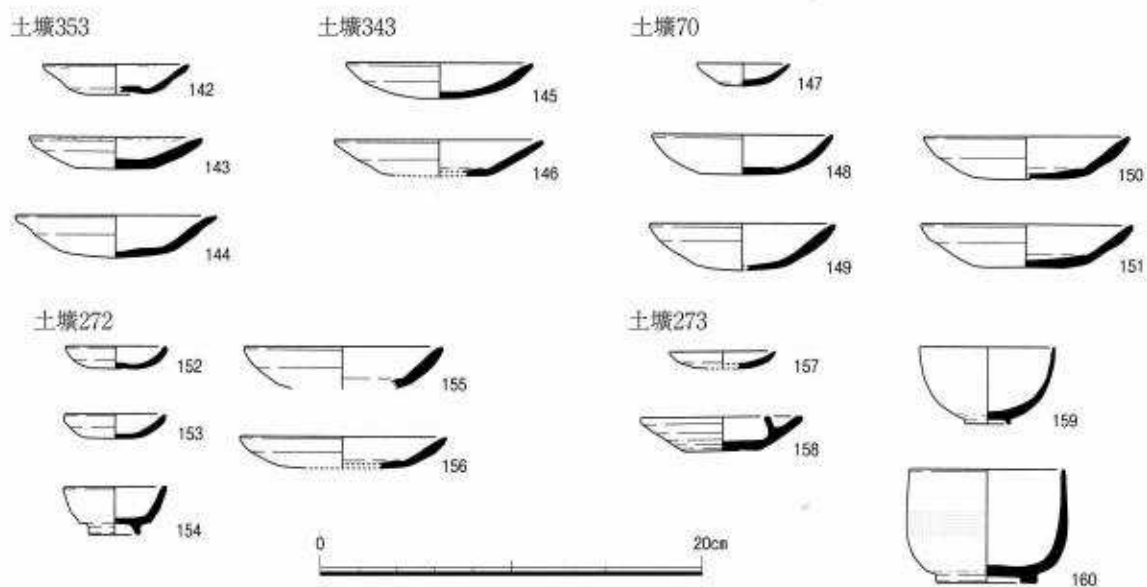


图30 土坑353・343・70・272・273出土遺物実測図 (1/4)

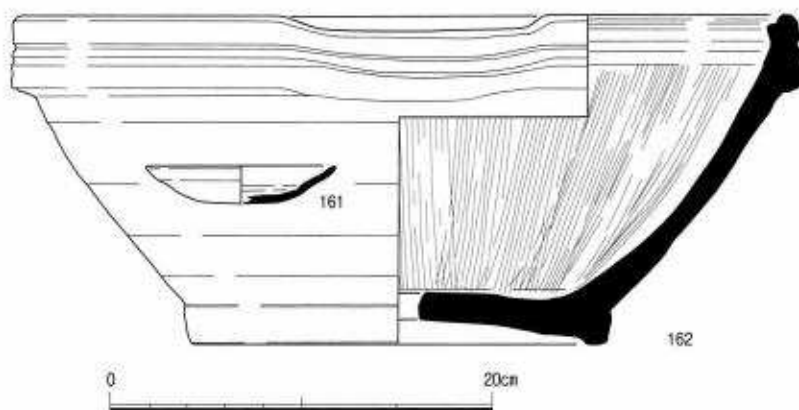


图31 土坑61出土遺物実測図 (1/4)

仕上げる。16世紀末から17世紀前半に位置づけられる。

建物1出土土器 (図29)

土師器小壺 (140)、土師器皿S (141) がある。いずれも柱穴108より出土。141の内面の底部と体部との境に浅い圈線が認められる。17世紀前半。

土壙353出土土器 (図30)

土師器皿N r (142)、土師器皿S (143、144) がある。143の口縁端部に炭化物が付着する。144の内面の底部と体部の境はヨコナデによりやや凹みをもつ。

土壙343出土土器 (図30)

土師器皿S (145、146) がある。146の底部内面には明瞭な圈線が認められる。

土壙70出土土器 (図30)

土師器皿N r (147)、土師器皿 (148～151) がある。150・151は底部内面に明瞭な圈線が認められる。

土壙272出土土器 (図30)

土師器皿N r (152、153)、土師器皿S (155、156)、施釉陶器小碗 (154) がある。

土壙273出土土器 (図30・図版11)

土師器皿N r (157)、灯明皿 (158)、陶器碗 (159、160) がある。158は口縁端部外面より内面全体を施釉する。159は外面体部下半は無釉である。高台の作りは丁寧である。160は浅い輪高台をもつ。

土壙61出土土器 (図31)

土師器皿S (161)、播鉢 (162) がある。161の底部に細い圈線をもち、体部はやや波打つ。162は備前播鉢である。11条の播目を施す。底部に孔を穿つ。

瓦 類 (図32・33・図版12・13)

平安時代から江戸時代の軒瓦が20点ほど出土した。

巴文軒丸瓦 (163～167)

163は土壙134出土。右巻きの三巴文である。外区に14個の珠文を配する。瓦当周縁は指押さえでの痕跡が残りやや雑である。胎土は精良で砂粒を含まない。164は池128出土。大粒の珠文を密に配する。周縁は低く、珠文と同じ高さである。胎土に砂粒を含む。165は井戸352の埋土出土。左巻きの巴文で、瓦当周縁部及び外周を丁寧に仕上げる。外区に小粒の珠文を配する。胎土は微砂粒を含み、焼成は良好。166は土壙365出土。右巻きの巴文である。外区に大粒の珠文を配し、範傷が認められる。周縁部は幅2.5cmと広く、全体に丁寧に仕上げる。胎土は白色微砂粒を含み精良である。唐草文軒平瓦 (175～177) とセットになる可能性がある。167は土壙343出土である。左巻きの巴文である。周縁部が高い。胎土は白色微砂粒を含み、やや硬質である。

菊丸瓦 (168)

土壙365出土。菊花文である。胎土は精良で、焼きはやや甘く、黄灰色を呈する。

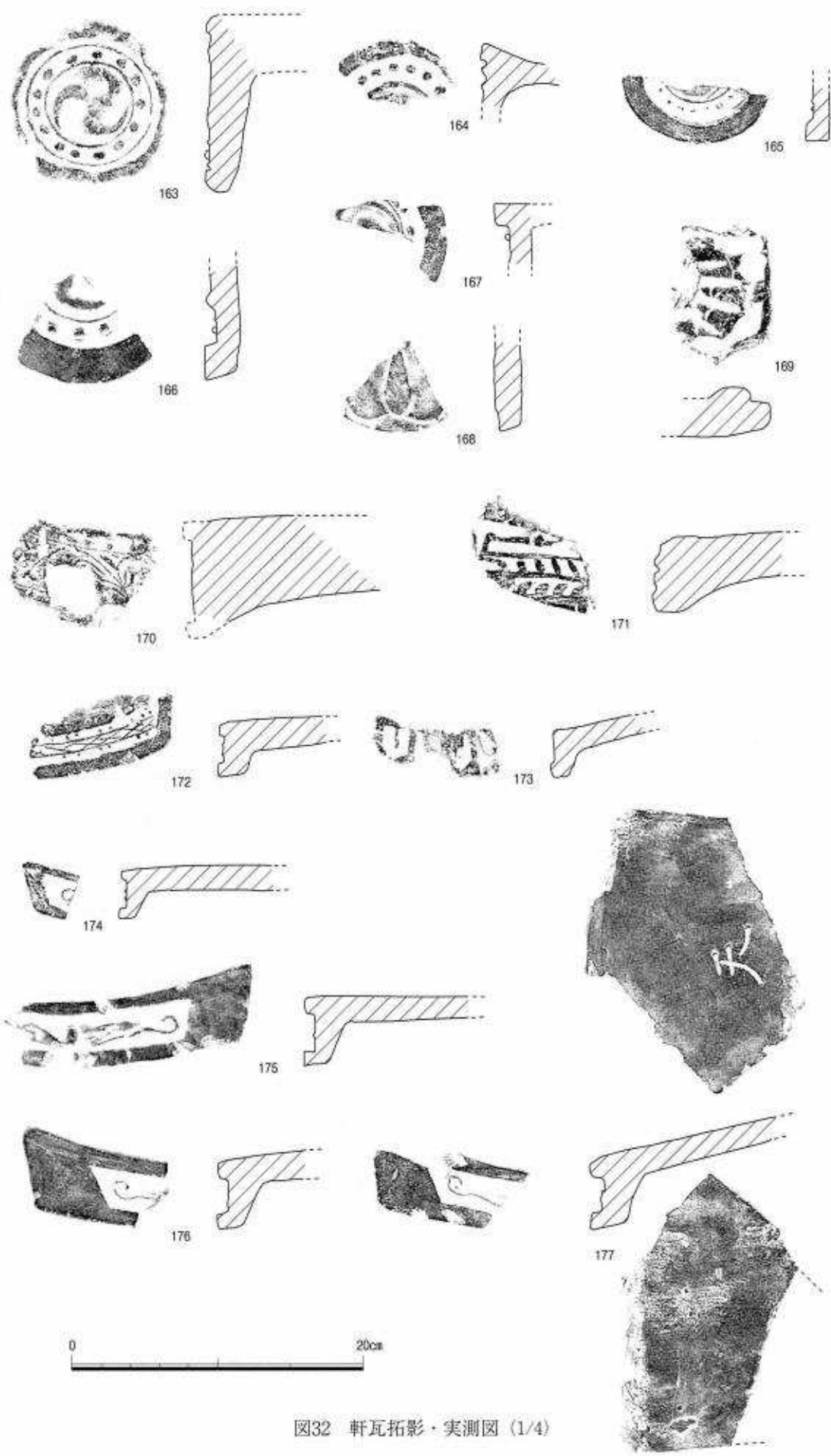


图32 軒瓦拓影·实测图 (1/4)

鬼瓦 (169)

井戸136の埋土出土。鬼瓦のどの部分かは不明。浮き彫りに造形する。1カ所溝状に穿つ。胎土は白色砂粒を多く含み、黒灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦 (170)

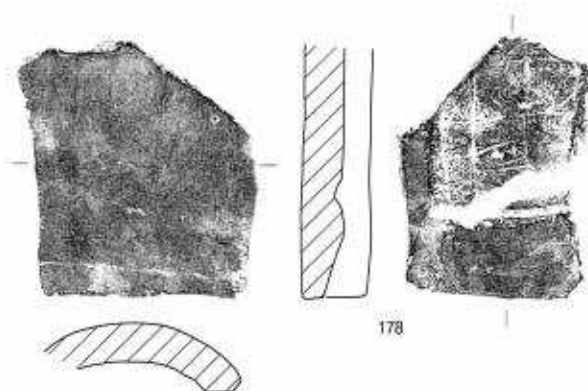
池128東肩部出土。二次焼成を受け残りが悪い。平瓦部凸面はタテ方向のヘラ削り調整。胎土は微砂粒を含み精良。西賀茂角社瓦窯系。平安時代前期。

唐草文軒平瓦 (171)

土壙139出土。二葉の枝状文を施す。瓦当上端はヨコ方向の削りで周縁が削り取られる。顎部はヨコ方向のヘラ削り、瓦当側面及び平瓦部凸面はタテ方向のヘラ削りをおこなう。平瓦部凹面は粗い布目痕が顕著に残る。胎土は砂粒を含み、堅緻、青みがかった灰色を呈する。内裏跡に同文の出土例がある。

斜格子文軒平瓦 (172)

井戸352掘形出土。斜格子文を施し、外区に2個を対とする珠文を配するやや小ぶりの瓦である。



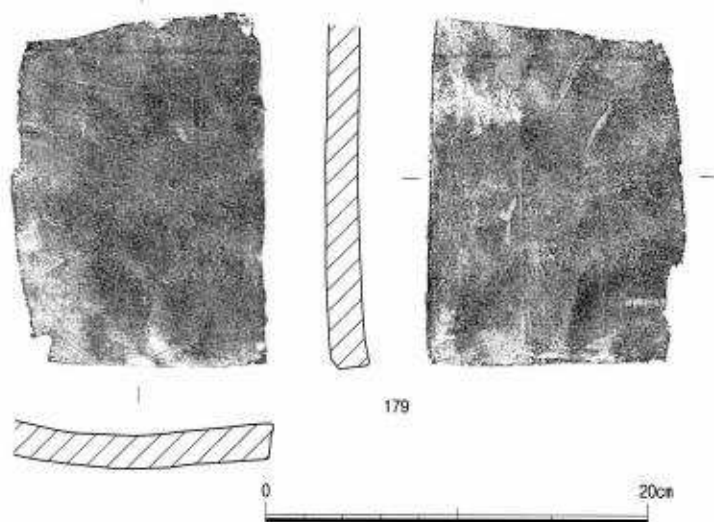
瓦当上端部及び顎部はヨコ方向のヘラ削り、平瓦部凹面は細かな布目痕が残る。胎土は砂粒を含みやや粗く灰白色、外面は黒灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦 (173)

井戸352石組内第2層出土である。瓦当面に布目痕が認められる。胎土は微砂粒を含み、精良。折り曲げ式。

唐草文軒平瓦 (174)

井戸352埋土出土。唐草の端は下に巻き込んで終わる。胎土は精良で堅緻。内外面平滑に仕上げる。



唐草文軒平瓦 (175~177)

3点共に土壙365出土。いずれも同范瓦である。三つ葉状の中心飾りをもち、一本の唐草が左右に反転して上方に巻き込む。瓦当面周縁の左右側縁は4~5cmの幅広で、巴文軒丸瓦166と

図33 丸瓦・平瓦拓影実測図 (1/4)

同じ特徴を有する。瓦当裏面及び平瓦部凹面は丁寧にナデで仕上げ。平瓦部凸面は削りのあとナデ調整をおこなう。177は平瓦部凹面中央部に「天」の字をヘラ書きする。瓦当面上端をヨコ方向にヘラ削りをおこない、面取する。瓦当部の成形においては、粘土継ぎ足し部の平瓦凸面部にヘラで斜め方向の数条の刻み目を入れ、端部は刺突文風に十数カ所の凹みを施して接合



写真1 軒平瓦177接合部

を補強する(写真1)。またこの瓦は平瓦部の側面の片方が45°の角度に面取しており、下り棟の両脇に配するために作られた軒瓦であることを示す。面取の形状より下り棟の右側の軒平瓦である。なお面取の先は丸く抉って成形しているのが認められる。軒平瓦3点共に胎土は微砂粒を含み精良、淡灰色を呈し、外面は黒灰色を呈する。本能寺城の瓦である。

丸・平瓦 (178・179)

丸瓦(178)の凹面には吊り縄の痕が認められる。端面及び側面は丁寧にヘラ削りをおこなう。平瓦(179)は凸面部に粘土板より切り取った痕跡が残る。いずれも微砂粒を含み精良、淡灰色を呈し、外面は黒灰色を呈する。いずれも土壙365出土。

石製品 (図34・35・図版14)

五輪塔 (180)

土壙346出土。五輪塔の火輪の部分である。花崗岩製である。

硯 (181・182)

181は溝230出土。四隅を入り隅に作る硯である。残存長5cm、幅5.2cm、厚さ1.0cmほどを測る。

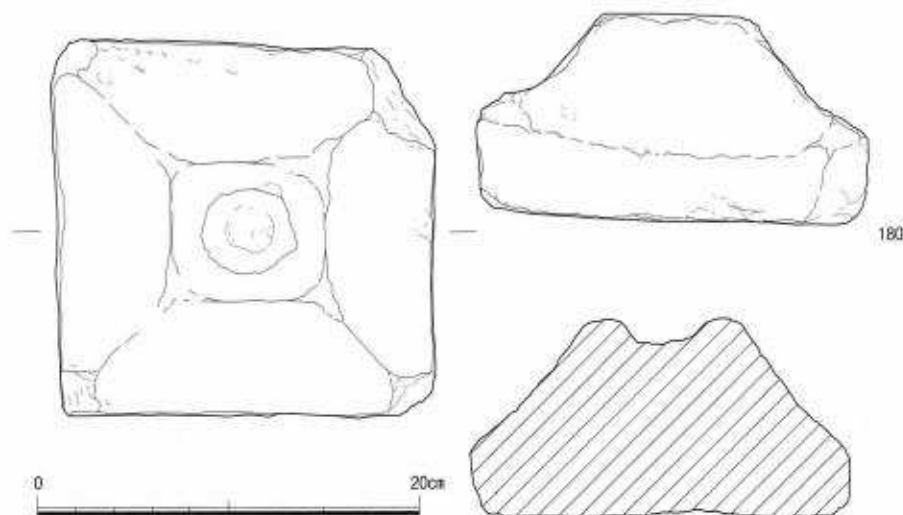


図34 石製品実測図(1)(1/4)

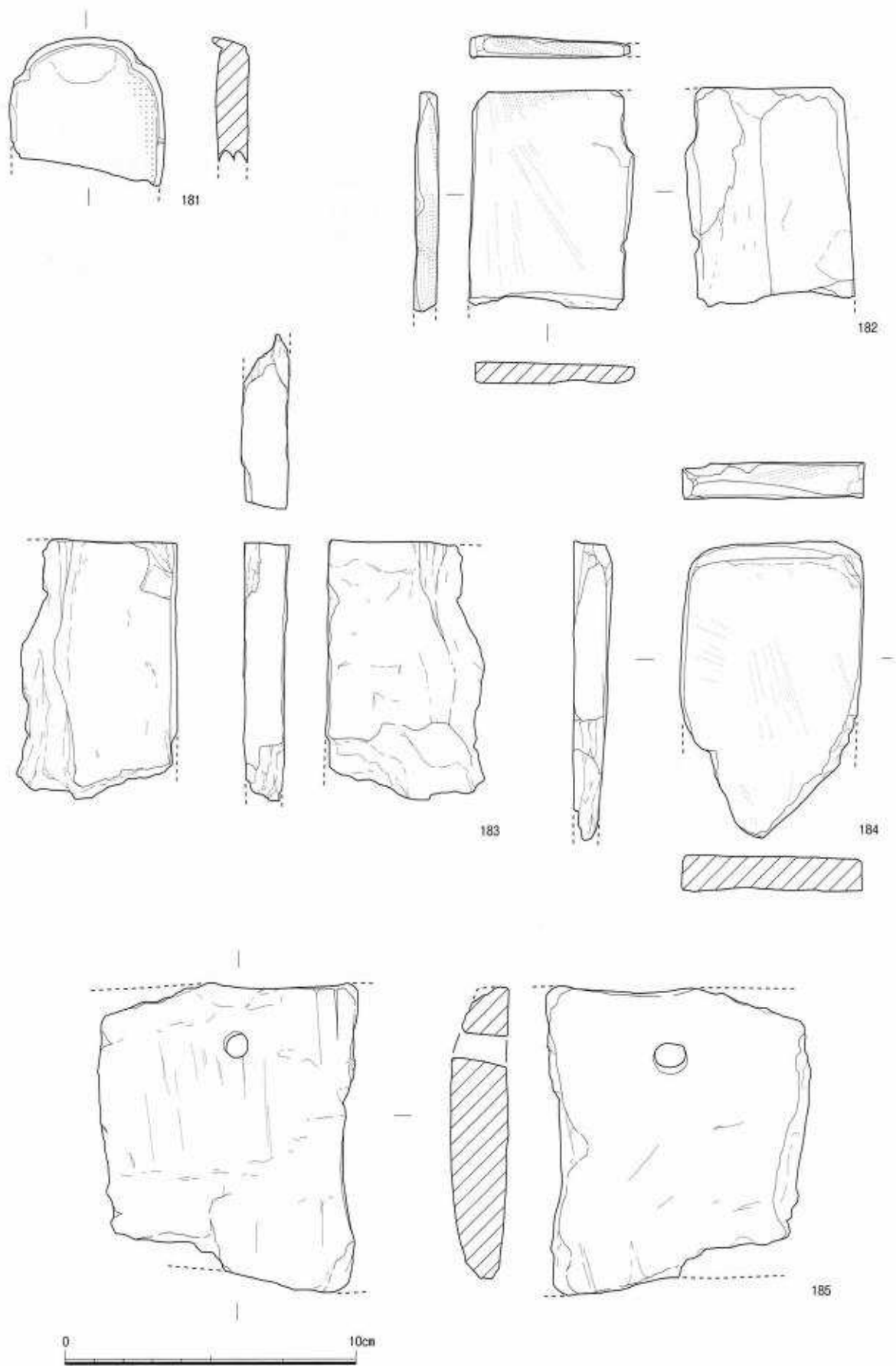


图35 石製品実測図(2)(1/2)

182は土壙179出土。硯の石材の可能性ある。残存長8.8cm、幅5.3cm、厚さ1.3cmを測る。

砥石 (183・184)

183は土壙365出土。両面共に砥石として使用する。残存長7.3cm、幅5.5cm、厚さ0.7cmを測る。

184は井戸352埋土出土。片面のみ使用する。残存長10.0cm、幅6.0cm、厚さ1.0cmを測る。

用途不明石製品 (185)

土壙288出土。上方に径1.0cmの孔を穿つ。片面は膨らみをもつ。滑石製である。石磬の可能性ある。

金属製品

銭貨、キセル、釘などがある。キセル、釘は江戸時代の遺構より出土した。銭貨は30点余りあるが、大半が判読が困難である。

銭貨 (図36)

天禧通寶 (186) は1017年初鑄。2・3・C～D地区の池128東肩部より出土。天聖元寶 (187) は1023年初鑄。篆書である。土壙353出土。嘉祐通寶 (188) は1056年初鑄。篆書である。1・2・B～C地区の整地層②より出土。熙寧元寶 (189) は1068年初鑄。真書である。土壙204出土。元豊通寶 (190) は1078年初鑄。行書である。2・B地区の整地層③より出土。元祐通寶 (191) は1086年初鑄。行書である。2・D地区の整地層②より出土。以上の6点の初鑄は北宋時代である。

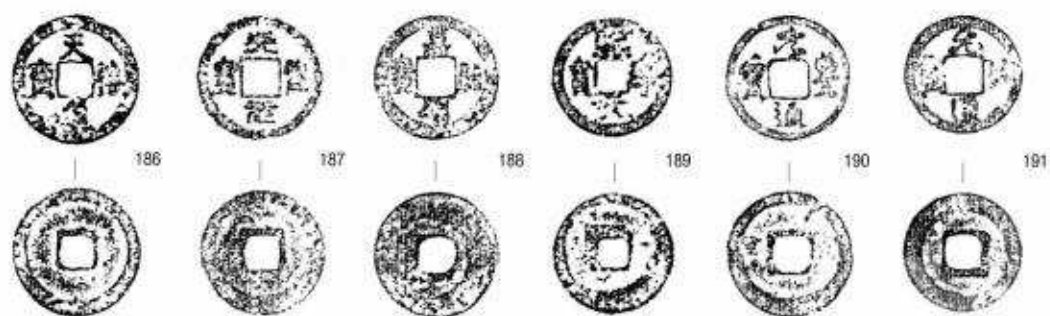


図36 銭貨拓影図 (1/1.5)

IV ま と め

今回の調査地・平安京左京四條二坊十五町は、明智光秀が織田信長を討った、いわゆる「本能寺の変」の舞台となったところである。天文法華の乱により京都を追放されていた法華衆徒が京都に帰着を許され、本能寺の再興をはかるためにこの十五町の土地を、天文14年(1545)土倉の沢村氏より購入している。本能寺の再建は天文16年(1547)よりおこなわれ伽藍の成立をみたものの、のちに織田信長が当寺を京都における宿所とし、天正8年(1580)に至っては村井貞勝に命じて城普請をおこない、御殿や表御堂などを建立している^{註5}。

今回の調査においては、南へ16m程離れた2007年度調査①で発見されたL字型の石垣を伴う堀・本能寺城の内堀の続きが検出できるものと期待されたが、堀跡は当調査地まで延びず、その延長線上には本能寺建立時に掘られた井戸352が存在する。その結果として石垣を伴う堀は当調査地の南辺部で西側に屈曲する可能性が高くなった。その場合、コの字型の堀の南北幅の全長は最大30m以内になり、堀に囲まれた空間地の南北幅は15m前後になる。この空間地に建物を建てることは不可能ではないが、御殿のような主要な建物は想定しにくく、いわゆる城を築く時の「出隅」のようなものを想定することが妥当であろうか。また、2007年度調査①の石垣を伴う堀跡から出土した瓦群は、軒丸瓦の瓦当中央部に「能」の異体文字を配する瓦が含まれることから、それらは明らかに本能寺の本堂などの建物を葺いていた瓦群であることを示す。しかし、堀の石垣の積み方をみると、織田信長が足利義昭のために造った旧二条城の石垣の造作と等しく、いわゆる「穴太積」といわれる特徴をもち、本能寺城の堀跡であることには疑いがない。またそれらの瓦の多くが焼けており、「本能寺の変」によって二次焼成を受けた一群とみられる。それは本能寺城を普請する時に、既存の本能寺の建物の一部を利用したか、あるいは瓦を再利用したこと示すものと考えられる。

土壌365出土軒瓦について

調査区の南半部で検出した土壌365は多量の瓦を包含し、瓦溜り状を呈する。瓦の多くが二次焼成を受けており、建物焼亡に伴う毀損瓦を埋めたものと考えられる。軒瓦は軒丸瓦2点(166・168)、軒平瓦3点(175~177)の計5点出土しており、軒平瓦はいずれも同文である。その1点(177)に平瓦部凹面中央部に「天」の字をヘラ書きする。この軒瓦は平瓦部側面を45°の角度で切り取って面取しており、下り棟の右側の軒瓦として作られたことを示す。ヘラ書きの「天」は縦3cm、横4cmの大きさで達筆である。とくに瓦当面の外周の内、左右側縁が幅広くなっており、これは同じく出土した巴文軒丸瓦(166)の周縁が幅広くなっている形態と同じ特徴を有している。巴文軒丸瓦(166)と唐草文軒平瓦(175~177)はセットになる可能性が高い。これらは伏見城跡出土の軒瓦の周縁が幅広くなる古期のものと共通点をもつ^{註8}。本能寺城の御殿が瓦葺きであったかどうかは不明であるが、「天」は「天下人」織田信長を意味する可能性が考えられ、これ

らは本能寺城普請に伴い製作された瓦とみなすことができる。出土した軒平瓦3点ともに同文瓦であること、軒平瓦と軒丸瓦の周縁部が幅広であること、また菊丸瓦を伴うことなどから土壌365出土瓦は一括性の高い性格を有している。これらの軒瓦の形態は本能寺城普請がおこなわれた1580年前後の標式となる可能性があり、本能寺城式瓦というべきものである。

西洞院川の変遷

溝411（西洞院川）の西肩口北壁第10層（図9）より出土した土器（土師器皿62～65）は16世紀前後のもので、これはその近い時期に西洞院川が西側へ拡張されたことを示す。また東西溝193の出土遺物は同じく16世紀前後のもので西洞院川の西側の拡張と同時に開鑿したものとみられ、これらの西洞院川の改変は、応仁の乱以降の下京総構えの軍事的再構築を示すものと考えられることができる。また調査区東壁（図5）の第57～65層（図9の8・12・13層は59・61・63層に対応）は砂質及びシルト混りの土層で西洞院川の底部自然堆積層で、第57層出土の土師器皿（71・72）は底部と体部の境に強いヨコナデによる圈線が認められ、16世紀後半代の特徴を示す。当地における本能寺建立時（天文16年）においては西洞院川の西肩部のみを整備したとみられ、天正8年に至って村井定勝による城普請に伴い西洞院川の西半部を8m以上の幅で埋め立て¹¹⁹、西洞院川を外堀として整備したものと考えられる。この西洞院川の西半部の埋め立て時期については、2007年度調査③の本能寺城の南堀が西洞院川を一部埋め立てたのち開鑿されたとする調査結果と一致する。ただ、その南堀が本能寺城の外堀として考えてみた場合、西洞院川が東側の外堀としてどのように整備されたかは調査地の敷地外となったため不明であったが、後日、当地より南50m離れた西洞院通に面する建築工事において西洞院通西端縁石下で石垣が組まれていることが確認され、本能寺城の外堀が石垣で囲まれていたことを示すものと注目される。

「本城惣右衛門覚書」について

「本能寺の変」から約60年後の寛永17年（1640）に明智光秀に従軍し、本能寺城に攻め入った一武士の懐古録として「本城惣右衛門覚書¹²⁰」なるものがある。その文中に「我等ハミなみほりきわへ、ひがしむきニ参候。ほん道へ出申候。其はしのきわニ、人一人い申候を、其ま、我等くびとり申候。それより内へ入候へば、もんハひらいて、ねずミほどなる物なく候つる。云々」との記述がある。その南堀際は本能寺城の南の外堀・2007年調査③で検出した東西堀（四条坊門小路）か、あるいは2003年度調査（図37）¹²¹の構えの堀を指すものとみられる。そして「本道」とは当然西洞院川のある西洞院通のことであろう。その橋の際に人がいたので首を取ったという、そして本能寺城の門は開いて、鼠一匹いなかったとする。この記述より西洞院通に出てから門は比較的近くにあったことがうかがえ、本能寺城の表門は西洞院通に面し、南寄りであったことが想定される。三浦正幸氏の『城のつくり方図典』によれば「築城の家相学¹²²」として「天守は乾（西北）に、表門は巽（東南）に」とするようである。このことから本能寺城の御殿は2007年度調査③付近に想定されるものと考えられる。また、同書によれば「艮（東北）の隅は城壁を切



図37 中世期変遷図 (1/3,200)

らかとなった。と同時に石垣を伴う堀跡（内堀）が十五町内をどのように巡るのか新たな問題が生じた。また「本城惣右衛門覚書」では内堀の橋を渡った記述が無く内堀の様子をうかがうことはできないが、内堀がどのように巡り、南の外堀と西洞院川が東の外堀として、北の六角通及び西の油小路通にどのような形で外堀が設定されていたのかも含め、課題として残った。今後の十五町の調査に期待したい。

り欠く」とされており、2007年度調査①で検出された石垣を伴う堀跡が当地の南側で曲がる可能性が高いことからそのような構造を想定することも可能と考えられる。2007年度調査①で石垣を伴うL字形の堀の検出をもって十五町の東北隅部に御殿を想定する考え方が出されたが、本来的に十五町の鬼門に当たるところに御殿を想定することには無理があるように思える。

ところでこの十五町の東北隅部において南北長6m、東西幅3mの範囲にわたって焼土面を検出した。この焼土面は整地層③上面で現出したもので、整地層③は本能寺城普請時の整地層である。焼土面は厚さ3cmほどにわたって堅く赤化しており、しかも全体に非常に均質な状態で出土した。当初、「本能寺の変」によって生じた焼土ではないかと認識したが、焼土面周辺には付随すると考えられる建物遺構は存在せず、また焼土に伴う炭化材、遺物なども全く認められなかった。当該地は内堀と築地塀などとの間の空閑地に当たることなどから、この焼土面は「本能寺の変」時の建物の焼亡に伴う焼土面ではなく、その後の本能寺再建時の後始末の一環としてここで何らかの焼却が集中しておこなわれた結果生じた焼土と考えることができようか。この地が本能寺城跡の東北隅部であることも含め、焼却の内実については今後の検討課題としておきたい。

以上、今回の調査では西洞院川変遷の一端を本能寺建立以前、本能寺建立、本能寺城普請の各段階で明らかにすることができた。また2007年度調査①で発見された石垣を伴う堀跡が当地の南側で屈曲することが明

- 註1 2007年度調査① 吉川義彦『本能寺城跡発掘調査報告・平安京左京四条二坊十五町』関西文化財調査会 2008年。
2007年度調査② 山本雅和『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年。
2007年度調査③ 平尾政幸『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年。
- 註2 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 註3 『平安京古瓦図録』平安博物館編 1977年。
- 註4 熊谷家文書。
- 註5 『信長公記』新人物往来社 1986年。
- 註6 三浦正幸『城のつくり方図典』小学館 2005年。
- 註7 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ～Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980～1982年。
- 註8 星野猷二『器瓦録想 其の二 伏見城』伏見城研究会 2006年。
- 註9 調査埋め戻し時に東敷地境界近くまでサブトレンチを入れ確認した。
- 註10 天理大学付属図書館所蔵。
- 註11 平尾政幸『平安京左京四条二坊十四町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年。
- 註12 註6と同じ。
- 註13 今谷明「信長の本能寺“御殿”について」『王権と都市』思文閣出版 2008年。

報告書抄録

ふりがな	ほんのうじじょうあと
書名	本能寺城跡
副書名	平安京左京四条二坊十五町
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	家崎孝治
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	2012年8月20日

所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほんのうじじょうあと 本能寺城跡 へいあんきょう 平安京 さきょうしじょう 左京四条 にぼう 二坊 じゅうごじょう 十五町	きょうと 京都市 なかくさく 中京区 にしのかういんとおろ 西洞院通 ろかくまが 六角下る いけすまちょう 池須町	26100	1	35度 00分 26秒	135度 45分 18秒	2012.03.06 ～ 2012.05.12	288㎡	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本能寺城跡 平安京左京四条 二坊十五町	都城跡 城館跡	平安時代 室町時代	土壇、柱穴、掘立柱建物、 溝、井戸	土師器、瓦器、国産陶 磁器、輸入陶磁器、石 製品、瓦類	本能寺の井戸 本能寺城の軒 瓦

	Aランク 点数 (箱数)	内 訳	Bランク (箱数)	Cランク (箱数)	出土箱数 合計
点数及び箱数	191点 (8箱)	土師器128点、灰釉陶器1点、白磁4点、 青磁4点、施釉陶器11点、焼き締陶器3 点、瓦器11点、軒瓦15点、丸・平瓦2点、 石製品6点、銭貨6点	68箱	0	76箱

版 圖



1 北半部第1面全景（北東から）



2 北半部第2面全景（北東から）



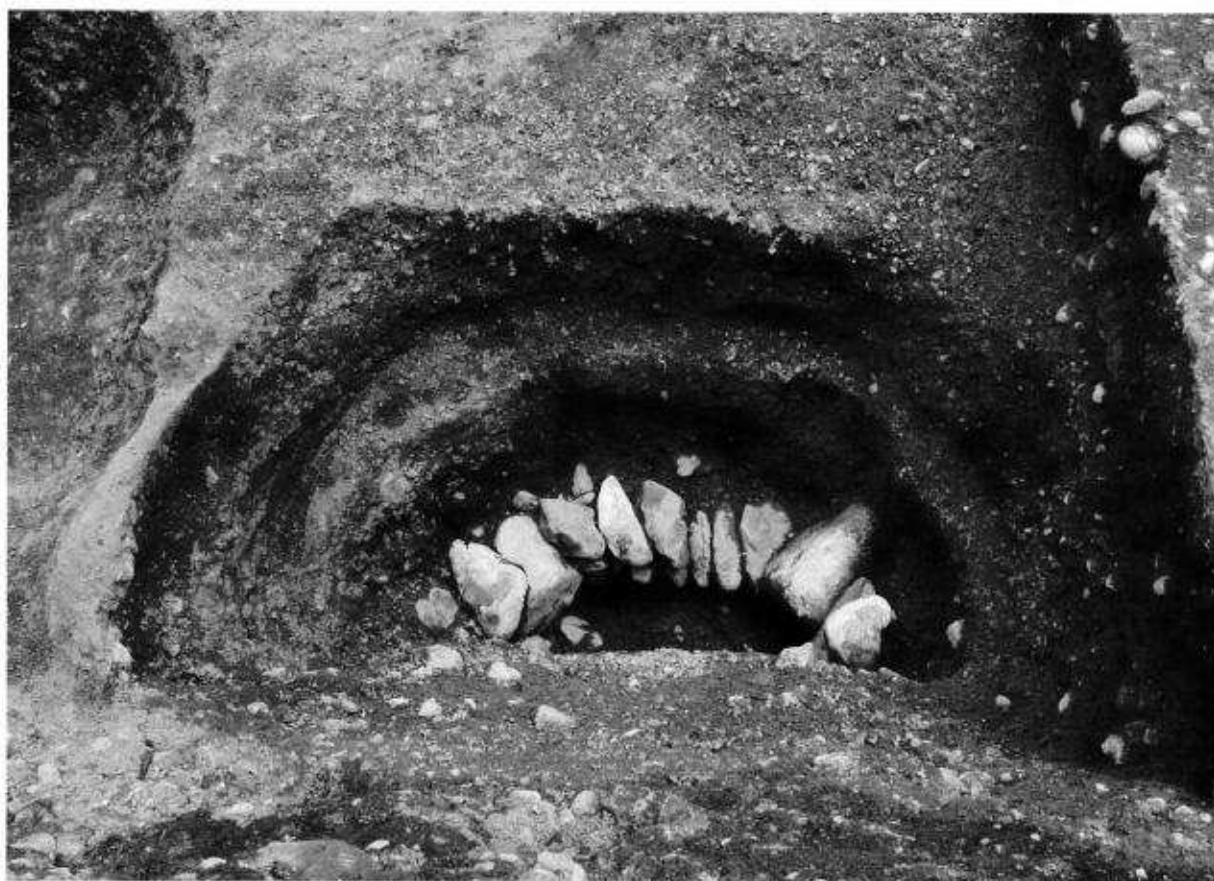
1 北半部第3面全景（北東から）



2 北半部第4面全景（北東から）



1 北半部第5面全景（北東から）



2 井戸136（西から）



1 溝193・230 (西から)



2 土城237 (東から)



1 南半部第1面全景(北から)



2 南西隅部第1面(南東から)



1 南半部第2面全景（北から）



2 南西隅部第2面（南東から）



1 南半部第3面全景（北から）



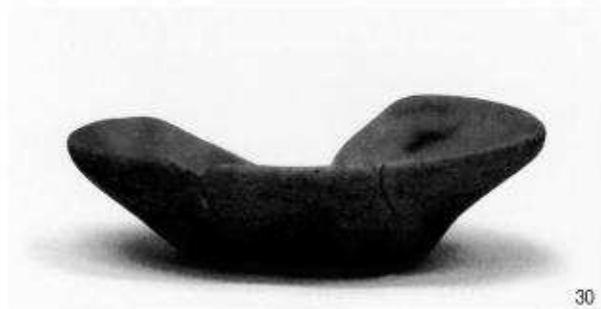
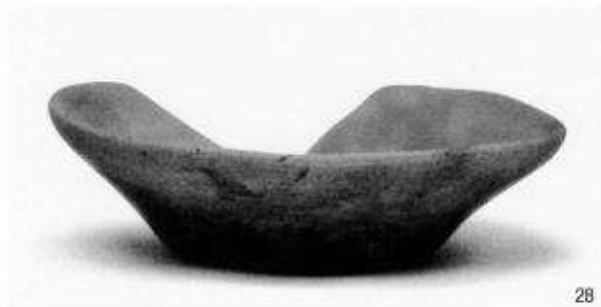
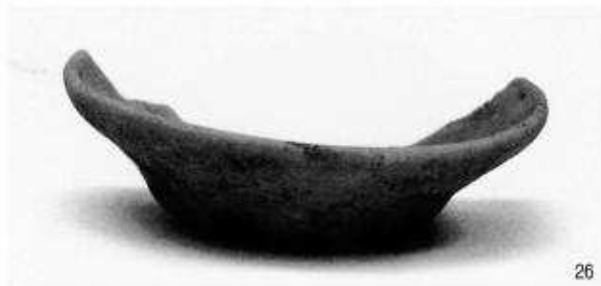
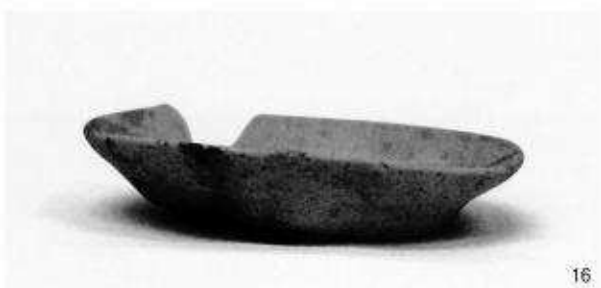
2 南西隅部第3面（南東から）



1 井戸322 (南から)



2 井戸352 (西から)



土城237 (16·21·22·24·26·28·30·31·33·41)·柵1 (43) 出土遺物



71

72



64

76



61

97



94

100

溝411 (64·71·72)·溝206 (61)·溝193 (76·94·97·100) 出土遺物



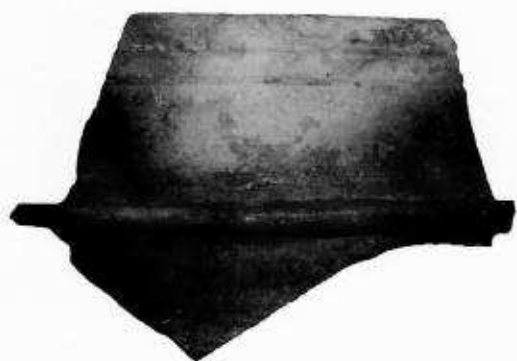
113



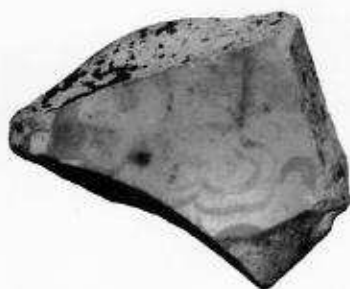
138



114



139



106



137



127

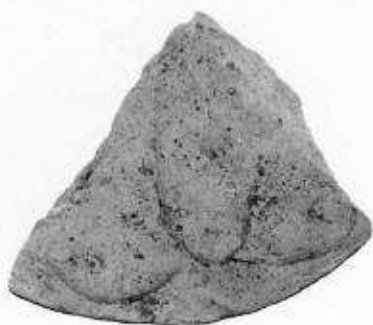


160

井戸352 (106・113・114)・整地層② (127)・井戸322 (137~139)・土壙273 (160) 出土遺物



163



168



165



169



164



170



167



171

土壙134 (163) · 井戸352 (165) · 土壙365 (166 · 168) · 土壙343 (167) · 井戸136 (169) · 池128 (164 · 170) · 土壙139 (171) 出土遺物



172



176



173



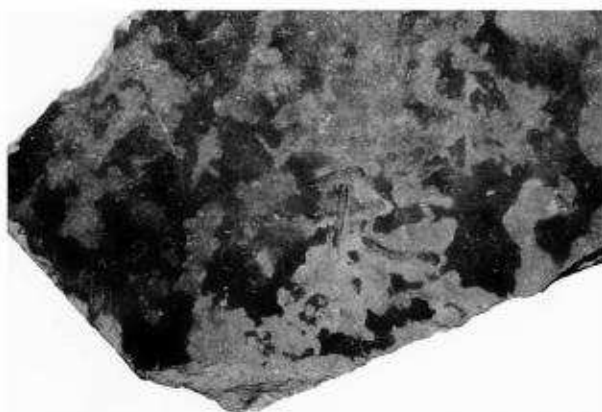
174



177



175



177外面(部分)

井戸352 (172~174)・土壙365 (175~177) 出土遺物



181



185



182



184



180



183

溝230 (181)・土壙179 (182)・土壙365 (183)・井戸352 (184)・土壙288 (185)・
土壙346 (180) 出土遺物

本能寺城跡

—平安京左京四条二坊十五町—

発行日 2012年8月20日
編集 古代文化調査会
発行 住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368
印刷 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034